

京都府埋蔵文化財情報

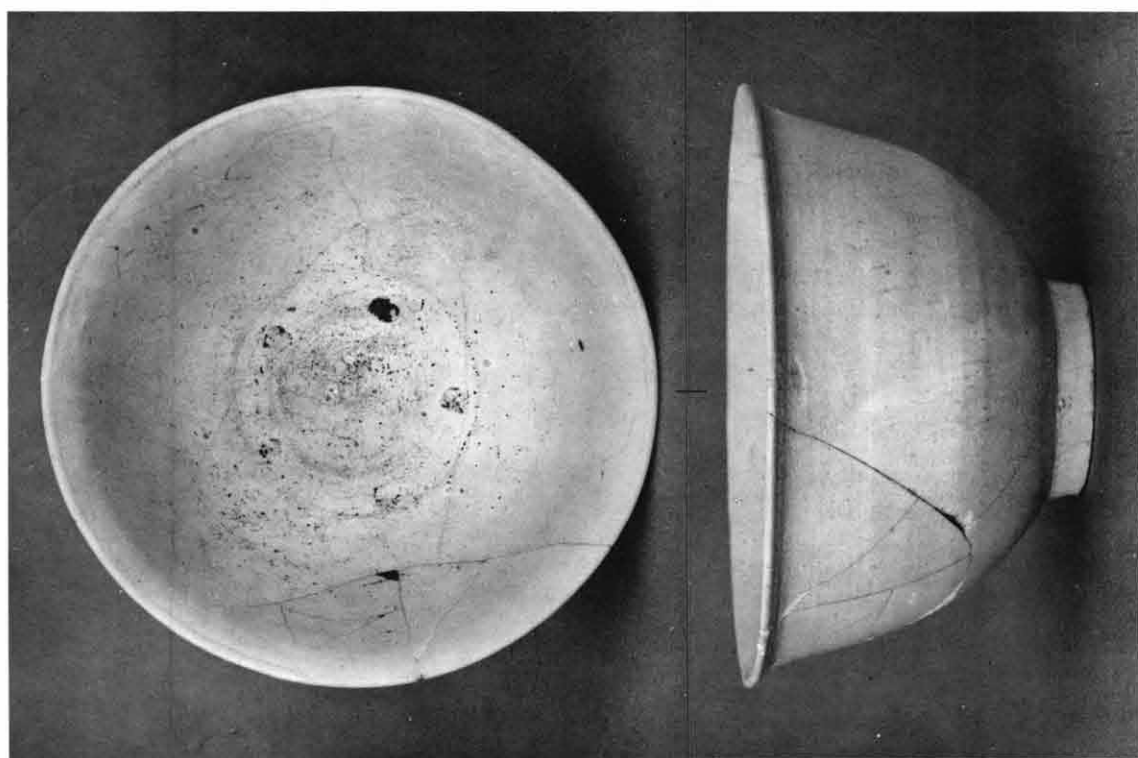
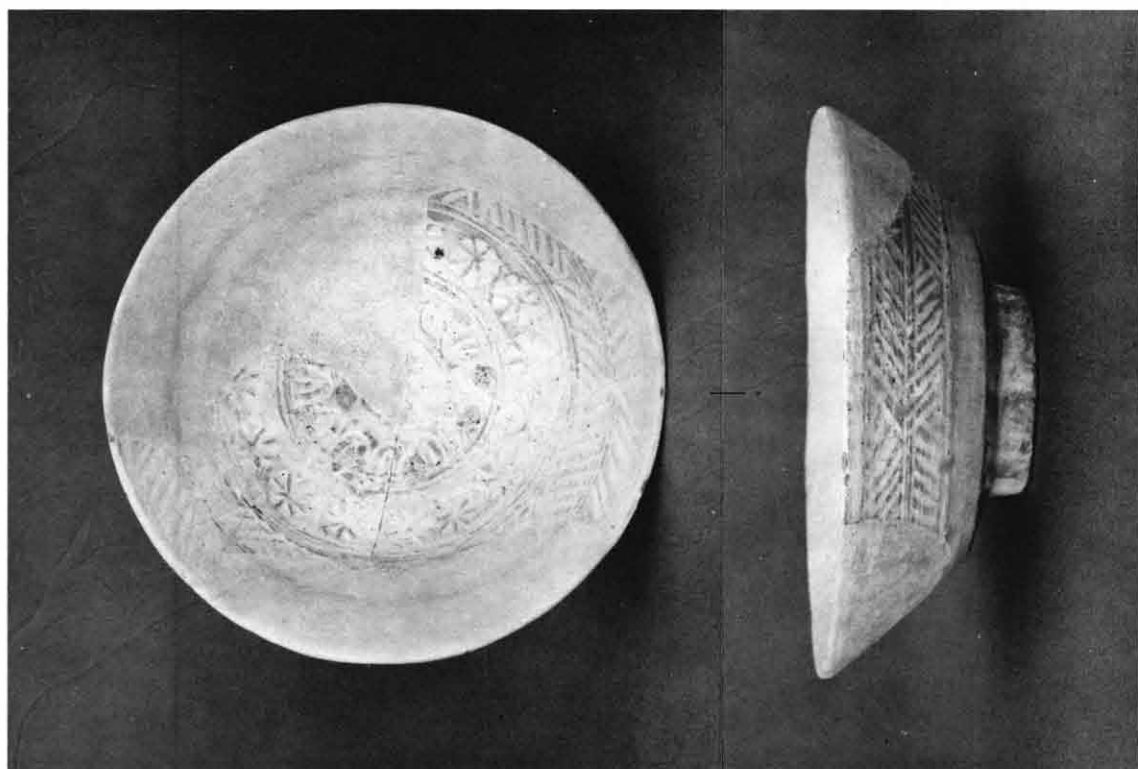
第 39 号

遠所遺跡群の発掘調査	増田 孝彦	1
長岡京跡左京第252次調査	中川 和哉	13
—平成2年度発掘調査略報—		19
10. こくばら野遺跡	14. 長岡京跡右京第363次(7ANNKN-5)	
11. 内和田古墳群	15. 興戸遺跡	
12. 田中西遺跡	16. 燈籠寺遺跡	
13. 蒲生遺跡第4次		
資料紹介 平安京跡左京一条三坊二町出土の朝鮮王朝陶磁器	引原 茂治	34
府下遺跡紹介 50. 平安京羅城門跡		41
長岡京跡調査だより		44
センターの動向		47
受贈図書一覧		49

1991年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

平安京跡左京一条三坊二町出土の朝鮮王朝陶磁器



遠所遺跡群の発掘調査

増 田 孝 彦

1. はじめに

遠所遺跡群は、京都府竹野郡弥栄町木橋・鳥取に所在する。農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の鴨谷団地造成工事に伴い、同局の依頼を受けて発掘調査を実施したものである。遺跡群は、弥栄町の西端、網野町との町境の山間部に位置し、谷入口部分には、ニゴレ古墳(5世紀中頃)が築造されている(第2図)。

遠所遺跡群の調査としては、昭和62年度に遠所古墳群(24基)のうち1号墳の調査を行い、昭和63年度には21基の古墳を調査した。その結果、これらの古墳は木棺直葬のものや、堅穴系横口式石室を内部主体とし、5世紀末～6世紀後半にかけて築造されたものであることが明らかとなった。墳形は大半が円墳であるが、1基のみ方墳がある。

昭和63年度調査中に、古墳群とは別に造成予定地内に遺物が散布する場所が認められたため試掘を行った。その結果、丘陵斜面や谷部から製鉄炉、須恵器登窯、炭窯、堅穴式住居跡、掘立柱建物跡等の遺構が確認された。出土した遺物は5世紀末～13世紀にまで及ぶが、遺構が伴うのは5世紀末～9世紀までであり、7世紀前半～8世紀中頃までの期間は、ほとんど活動した痕跡が認められない。遺構は、広範囲(47ha)にわたるため便宜上A～Zまでの地区と、J―奥、O―東、通り谷、百合釜地区に分けている。また、町境いの分水嶺付近に広がるため、隣接する網野町側にも遺跡群内と同じ小字名が存在することから、本来は一つの地域であったようで、遺跡はさらに広範囲に広がるものと思われる。



第1図 調査地位置図(1/50,000)

2. 調査概要

古墳群の調査は、22基までは終了し

ているが、残る2基については、平成3年度に実施する予定である。終了したものについては、すでに概要報告している^(注1)ので、古墳以外の遺構を対象とする。

調査は、平成元年度にG(一部)、J・K・L・O・O—東・P・T・U・X地区を行い、平成2年度は、A・B地区の一部とC・D・E・F・G(一部)・S・V・Z・通り谷地区の調査を行った。

以下、元年度、2年度の調査結果の概要を簡単に述べる。

遠所遺跡群は、現在も調査を継続中であり、遺構の実数はさらに増加すると思われるが、いままでのところ古墳群(24基)、製鉄炉(8基)、鍛冶炉(12基)、炭窯(198基)、須恵器登窯(6基)、鉄生産、炭焼き、須恵器生産に伴う竪穴式住居跡、掘立柱建物跡等の遺構から構成されている。

製鉄炉 A地区に5基、E・O・S地区にそれぞれ1基ずつ検出したが、O地区は鉄滓の堆積状況からすると、造成予定地外となる周辺の谷部にさらに2～3基の製鉄炉が存在する可能性がある。また、J地区では製鉄炉は検出されなかったが、人工的な流路内に5世紀末～6世紀初頭に比定される多量の土器、炭、鉄滓が共伴して出土しており、この流路始まり部分には、登窯状炭窯2基が築造されていることから、この時期に製鉄を行っていた可能性を示唆するものもあった。

検出した製鉄炉は、いずれも長方形箱形炉と呼ばれるものであるが、開墾を受けているため全体の規模がわかるものは少なく、基礎がごく一部残存していたにすぎない。炉の基礎部分は、O地区のように偏平な石を敷き並べるものと、なにもしないものがあるが、内部は砂鉄・木炭・砂・鉄滓が充填されていた。また、製錬滓の流れ出す部分は、両側に排滓溝がつくものと、片側にしか排滓溝が認められないものもある。O地区のように片側が排滓溝で、反対側が排滓坑となっているものもある(第3図)。製鉄炉全体の規模がわかるものは、E・S地区しかないが、E地区のもので長さ2.9m・幅0.5m、S地区のものは長さ3.5m・幅0.9mを測る。これらの製鉄炉は、谷部や丘陵の先端を削り出した部分に築かれているが、等高線に対して直交(縦置)するものと、平行(横置)するものがあるが、意識的に設けられたのではなく、地形的な制約によるものと思われる。また、製鉄には水と関わりがあるようで、製鉄炉の横には必ず流路とか自然地形の谷部を堰止めて、池が作られており、池や流路の設けられないA地区の場合、大甕が水甕として掘り据えられていたようである。

製鉄の原料は、山や川で採集された塩基性(赤目)砂鉄と呼ばれるもので、冶金学的分析の結果、最低4種類の砂鉄が使用されていることが判明した。遺跡群内でも砂鉄は多量に採集できるが、その砂鉄は使用されておらず、他の地域から持ち込まれたものが原料とな



第2図 遠所遺跡群分布図

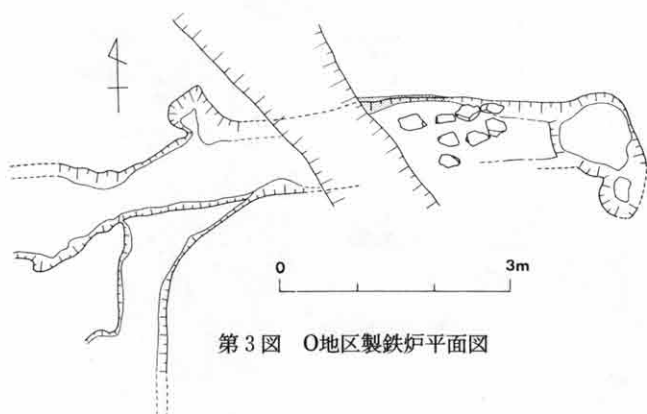
っている。

A地区では原料となった砂鉄が、製鉄炉横の土坑から8kg出土しているが、規模や検出された位置からすると貯蔵穴ではなく、祭祀的な性格を帯びるものと考えられる。製鉄炉の操業時期については、出土した遺物や科学分析の結果、E・O地区については6世紀後半、A・S地区は奈良時代後半となり、E・O地区については国内で確認された製鉄炉の中でも最古級のものであることが明らかとなった。

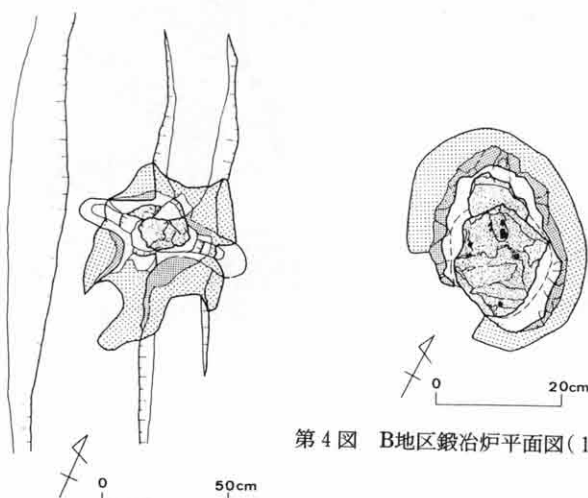
鍛冶炉 鍛冶工房跡と考えられるB地区から検出したもので、確認した12基の鍛冶炉は

すべて奈良時代後半のものである。

A地区に関しては、奈良時代後半の製鉄炉の下層に一边7mを測る竪穴式住居跡が6～7基重なり合ったところがあり、内部から直径50～80cmを測る焼土塊が多数認められることや、一边15mを測る竪穴式住居跡も存在しており、鍛冶工房跡と考えられる。これらの竪穴式住居跡は、出土遺物からいずれも6世紀後半に比定される。また、多数の焼土塊は鍛冶炉の基礎(精練鍛冶炉か鍛練鍛冶炉かは不明)となるように、粘土、砂、砂鉄を混ぜた土を住居床面に貼り付け焼き固めた後、その上に炉を築く



第3図 O地区製鉄炉平面図



第4図 B地区鍛冶炉平面図(1)



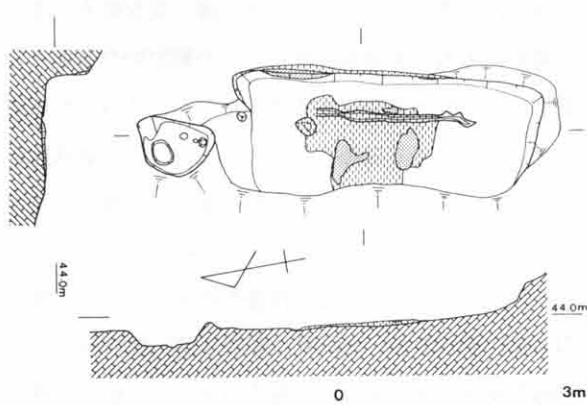
第5図 B地区鍛冶炉平面図(2)

ようである。この焼き固められた焼土塊は、一度焼き固められた後、薄く炭を敷き、さらにその上にももう一度焼き固められた跡があるものも認められた。この鍛冶炉の基礎と思われる焼土塊中に含まれる砂鉄は、量的には全焼土量からすると少ないが、注目される点は、焼土内に含まれる砂鉄が製鉄炉同様、遺跡群内で採集されたものではなく、製鉄原料となった砂鉄と同じものが使用されていることである。このことからすると、製鉄を行った集団と鍛冶生産を行う集団とは、同一であったとも考えられる。

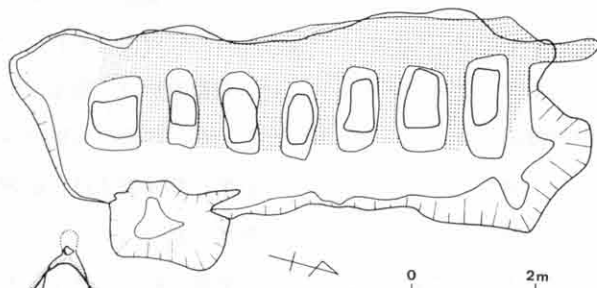
B地区からは、12基の鍛冶炉を検出したが、いずれも奈良時代後半のものである。鍛冶炉は、直径約40～50cmを測り、内部に碗形滓が詰まった状態のもの3基、取り除かれた状態のもの4基、A地区の竪穴式住居跡内検出の焼土塊と同じ焼土の上に、炉底部の粘土塊と思われるものが付いた状態のもの2基、焼土塊のみの広がり3基を確認した。このうち、碗形滓の詰まった状態のものは、フイゴ羽口の装着されていた痕跡を残すものと、認められないものがある(第4図)。このうち、装着痕が残るものは製品の出し入れ口に対して直交する2方向から風を送るものと(第5図)、出し入れ口の反対側とそれに対して左側90度の位置に設けられていたものと2種類がある。これらの鍛冶炉は、冶金学的分析を行って見ないと精練鍛冶炉か鍛練鍛冶炉かどちらともいえないが、周辺から取り外され棄てられた碗形滓が多量に出土しており、それらを分析した結果、精練鍛冶滓と鍛練鍛冶滓があることがわかり、この3基の鍛冶炉の碗形滓をみても外観上異なっており、どちらかに分けられるものと考えられる。また、鍛冶炉周辺からは、製錬で取れた鉄を小割りにしたと考えられる鉄塊状のものや、リサイクルするつもりであったのか、小割りにした刀、研減りした刀子、鍛造剝片、湯玉が出土している。また、これらとともに製品(刀子、釘、馬具、鑿状製品)も出土した。製品に対しても分析を行ったところ、A・B地区においては、原料—製錬(製鉄)—精練鍛冶—鍛練鍛冶—製品という、奈良時代後期における一貫した生産体制が復原された。

B地区にはまだ下層遺構が存在しており、一部5世紀末、6世紀後半の竪穴式住居跡や時期不明の鍛冶炉が認められたり、5世紀末～6世紀末までの遺物が多量に出土することから、古墳時代の鍛冶工房が存在する可能性が高い。このことから、遺跡群内では製鉄炉が存在しない時期にも鍛冶生産が行われていたことになり、燃料となる木炭を求めて製鉄炉は移動したが、鉄だけはここに運び込み製品化していたとも考えられる。

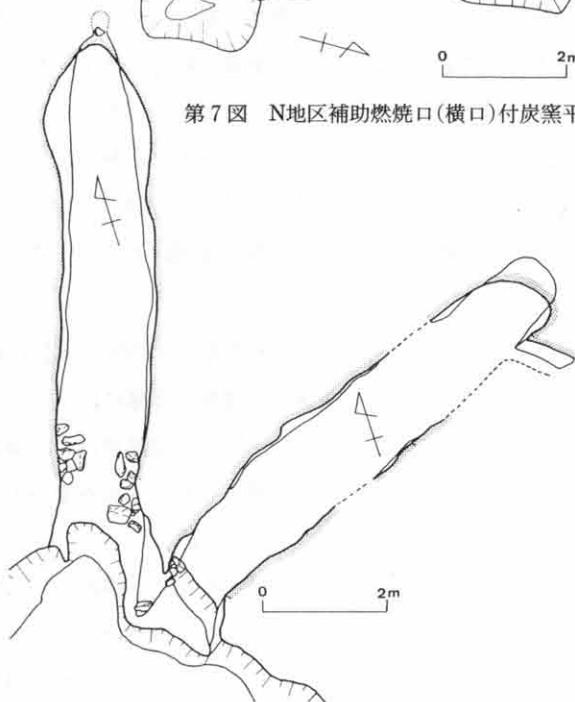
炭 窯 鉄生産には、燃料となる木炭を大量に必要とする。そのため、遺跡群内全域において炭窯が存在している。炭窯を平面形の違いだけで見た場合、6種類ほど認められるが、大半が0.8～1.0mほどの円形、方形の小型の炭窯である。なかには、1.5mを超える大きなものもある。



第6図 C地区炭窯実測図



第7図 N地区補助燃焼口(横口)付炭窯平面図



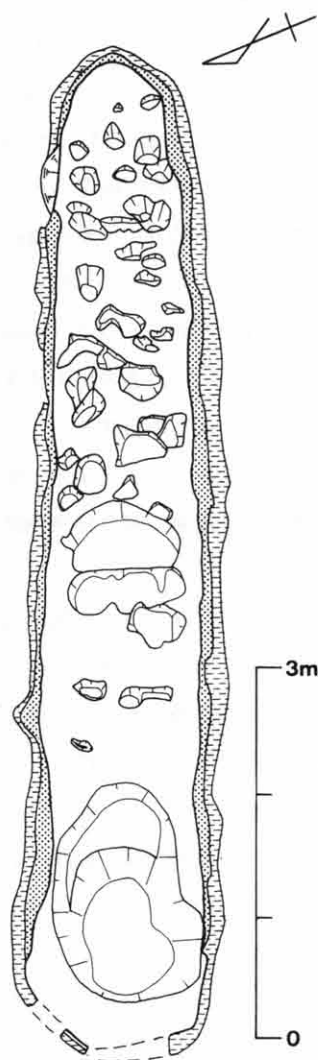
第8図 O地区登窯状炭窯平面図

通常、製鉄遺跡の調査で確認される補助燃焼口(横口)付炭窯が現状では3基(A・K・N地区)しかなく、調査対象地外に分布するのか、あるいは今後の調査予定地内に分布しているのか、数が少ないため不自然な感じを受ける(第7図)。この窯に対して、登窯状炭窯は奈良時代後半のものは、須恵器登窯を炭窯に転用したものや(E地区)、登窯状炭窯を須恵器登窯に逆転用したもの(A地区)が、それぞれ1基ずつある。古墳時代のものは、灰原が一つで窯本体が「V」字状に2基広がっており、焚き口付近でひとつにつながっているもので、O・J地区に認められた(第8図)。そのほか、時期は不明であるが、D・G・S地区にも各々1基ずつ

つ認められた。この2種類の大型の炭窯は、長さ10m前後、幅1m前後の規模を有し、いずれも山の斜面をトンネル状にくり抜いたものであり、補助燃焼口(横口)付炭窯は、素掘りのままであるが、登窯状炭窯は窯全体をスサ入りの粘土で窯壁を構築するものと、焚き口部付近のみスサ入りの粘土を貼り付けるものがある。補助燃焼口(横口)付炭窯は、A・K地区のものは焚き口となる部分がなく、煙道から最も離れた横口が焚き口かつ炭材の入れ口となるようである。それに対して、N地区のものは本来焚き口とされるところが焼けておらず、空気取り入れ口としたようで、煙道から最も遠い横口が焚き口となっているようである。天井部が崩落せず築造当時のまま残っていたものや(J地区)、窯出し最中に天井部が崩落し炭を取り出さずそのまま放棄されたものも認められた。放棄された炭材を見てみると、樹種はいろいろ認められるが、細いものは小指ぐらいのものから、太いものは直径25cmほどのものが同時に焼かれている。また、炭材は炭窯の時期が異なっても、その切断面はナタでスパッと切った、ペン先のような断面をしている。

大型の炭窯が少ない分、等高線に平行して築かれた長さ4～6m、残存幅0.7～2m程の規模を有する中型の炭窯があるが、円形、方形の炭窯と同じような造炭方法をとっており、10基ほど検出した(第6図)。

須恵器登窯 A・E地区で各2基、C・H地区で各1基確認しているが、H地区のものは平成3年度調査予定である。また、A地区北側の造成予定地外にも1基存在する。A地区の登窯は、同じ場所に2基の登窯が重複して築造されているが、灰原の下層には一辺15mの竪穴式住居跡があり、さらに登窯の上部には製鉄炉が築かれており、同じ場所が4回にわたり使用されている。初期操業の登窯の燃焼部には、石材が落ちこんでいることや、須恵器登窯の灰原下層にかなり厚い炭層があることから、炭窯としても使用されたようである。初期の窯の焼成部2分の1



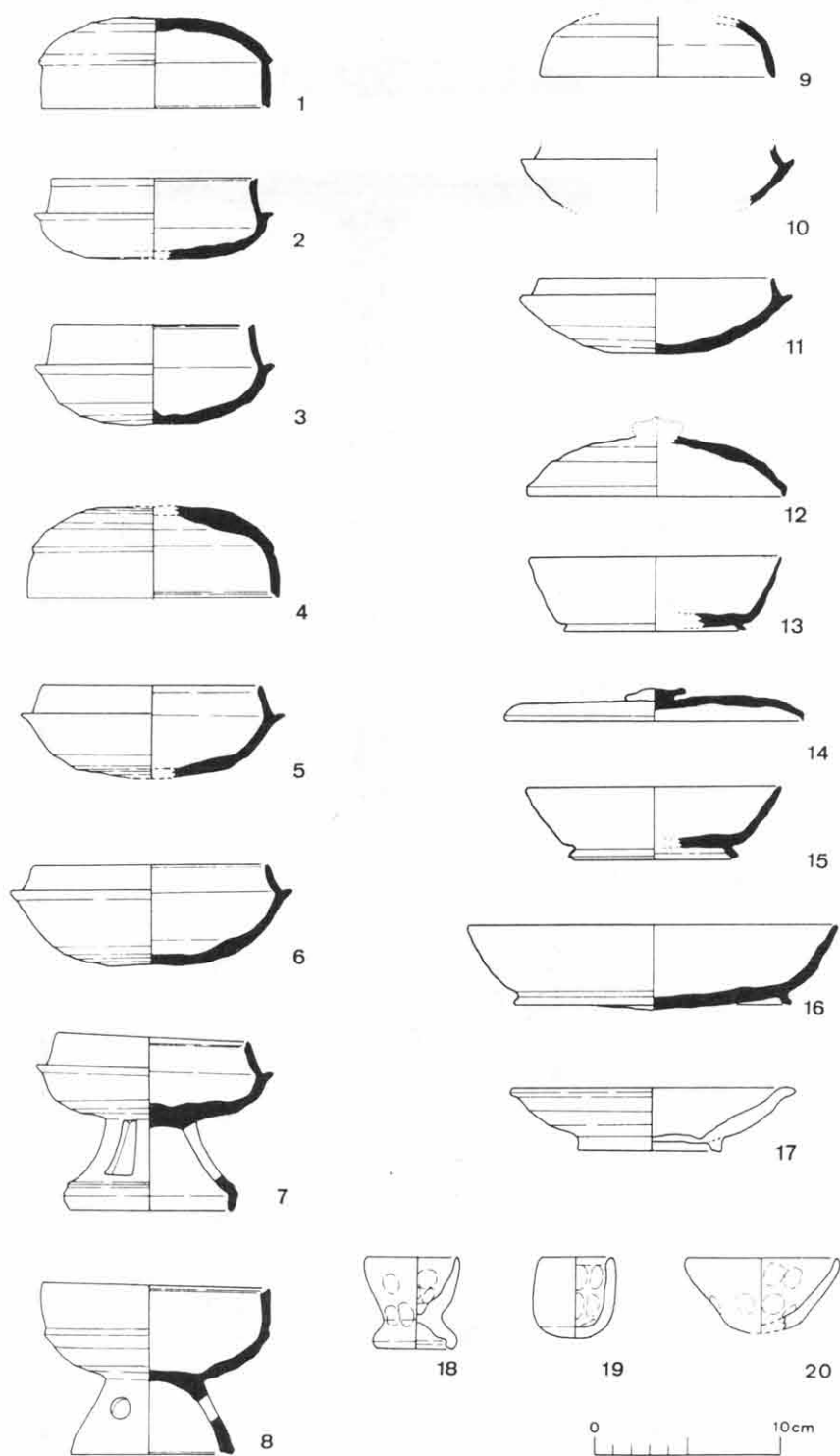
第9図 E地区登窯平面図

を埋め、新しい窯の床面を作っているが、初期の窯に比べ規模が縮小し、床面傾斜角度もかなり緩やかになっている。登窯を同じところに設けたのは、登窯状炭窯を見た場合、焚き口部の閉塞を壊し窯出しを行うが、その際に約1mほど壊れており、1回の操業ごとに焚き口が奥に進み、炭化部の規模が縮小している。このことから考えると、炭窯で操業が終わった後、須恵器登窯として操業するためには、かなり修復する必要が生じたため、初期の窯の利用できる部分のみ使用し、そのほかの部分は新たに作ったものとおもわれる。また、この登窯の操業が停止した後、斜面を削り出して製鉄炉が築造されるが、その際に登窯本体は排水溝として利用され、煙道付近は鉄生産時の物入れとなっていたようである。

C地区は半地下式の登窯で、天井部は崩落し窯体内に堆積していたが、壁、床面は粘土で補強し、天井部はスサ入り粘土を使用していた。床面傾斜角度が30度と急なため、床面には30cm前後のくぼみが十数か所あり、器を固定するための焼き台があったと考えられる。A・C地区の登窯は、全長約9.5m前後、幅約1.5m前後の規模をもつ。

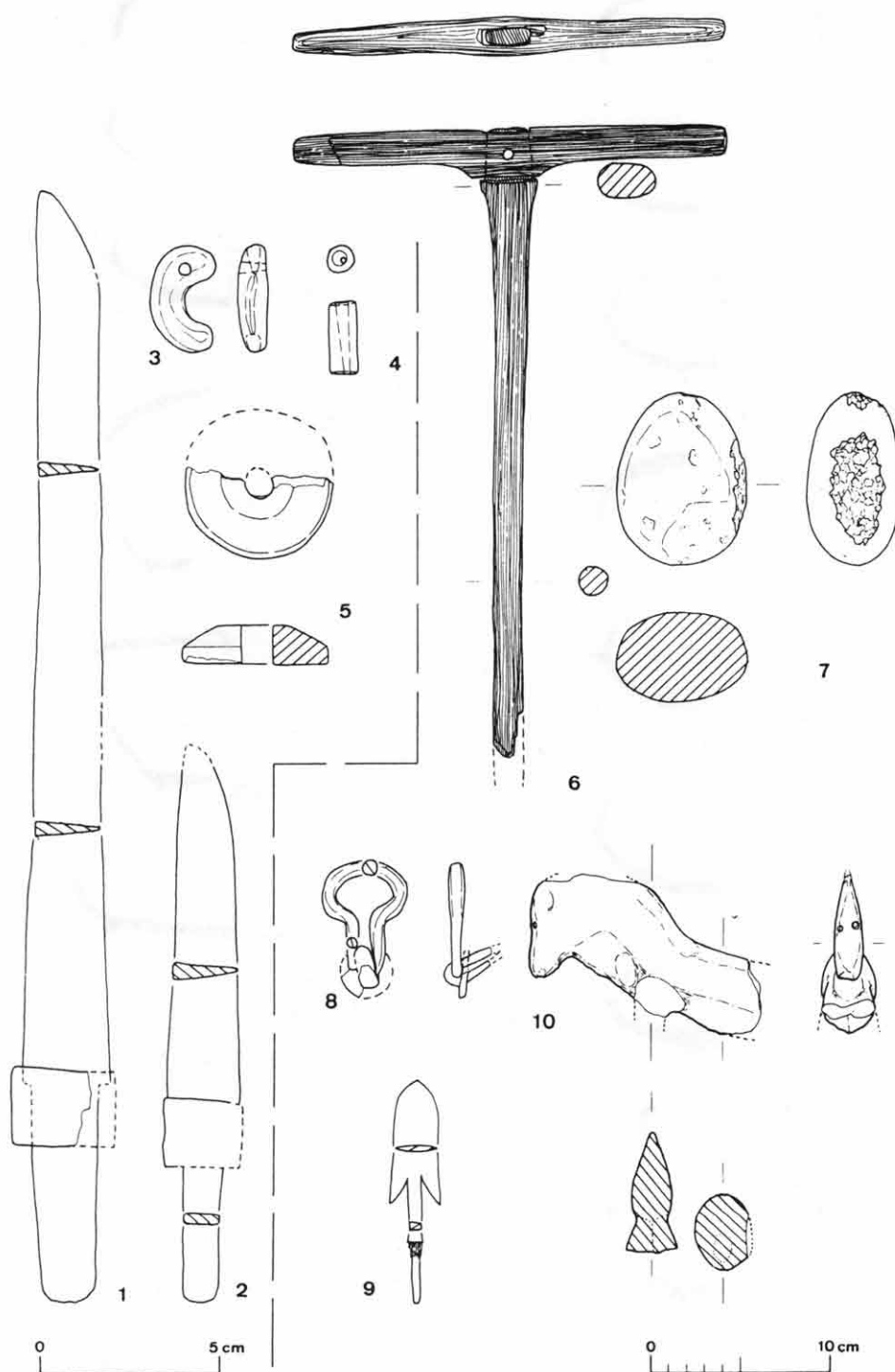
E地区には炭窯に転用された窯以外に、もう1基須恵器登窯が存在する。E地区東端に位置し、全長約9m・最大幅約2mを測る遺跡群最大規模の登窯である(第9図)。天井部と焚き口部をスサ入りの粘土で構築しており、焼成部は地山面をそのまま利用していた。ほかの登窯と異なる点は、床面から出土する土器の9割が甕の破片であり、しかも大型品に限られている。甕の出土状況からすると、少なくとも一度に6個体の大甕を焼いたと思われる。これらの登窯は、いずれも奈良時代後半に比定されるものである。また、灰原自体が小規模なことからすると操業回数も2～3回ほどと思われる。

竪穴式住居跡・掘立柱建物跡 上記の遺構がある周辺には、竪穴式住居跡、掘立柱建物跡が広がっている。いずれも丘陵の比較的緩やかな斜面に立地するが、竪穴式住居跡の場合、斜面高位側を削り、低位側に盛土して平坦部を作りその上に建てているため、住居を検出しても低位側の盛土が流失しており、全体の何分の一かが残っているにすぎない。また、掘立柱建物跡にしても開墾を受けたり、遺構の建て替えをしたときに削平されたりしており、建物全体の規模がわかるものが少ない。柱穴がかなり急斜面にも認められることから、炭材、伐採した薪を積み上げていた小屋、仮設的な建物等が建っていた可能性がある。これらの遺構は、製鉄、鍛冶生産、炭焼き、須恵器生産に従事した人々が使用したものであり、周辺からは多量の土器類(須恵器、土師器、ミニチュア土器、土馬、土鍾)とともに、石器(砥石、叩石、凹石、紡錘車、大型石鍾)、木器(鋤、杵等の織物用具や建築部材)、玉類(切子玉、管玉)^(注2)、銅鏃、食物類(獣骨、貝類、木の実)が出土した(第10・11図)。このうち、ミニチュア土器が出土するのは、各時期を通じて製鉄炉・鍛冶炉が存在する場所に限られるようである。



第10図 出土遺物実測図(1)

1～8・18～20：J地区 9・10：O地区 11：U地区 12～16：E地区 17：A地区



第11図 出土遺物実測図(2)

1～4・8・9：遠所古墳群 5～7：J地区 10：B地区

通常、製鉄遺跡の調査ではほとんど遺物が出土していないことからすると、生産と生活の場は別々になっていたと思われるが、遠所遺跡群の場合は、生産の場が生活の場でもあったようである。

3. ま と め

いままでの、遠所遺跡群の調査成果を簡単にまとめると、遺跡群内には5世紀後半～13世紀にかけての遺物が出土し、7世紀前半～8世紀中頃、9世紀以降はほとんど活動した痕跡が認められないものの、長期にわたりこの地が利用されていることが判明した。その中でも、製鉄炉をはじめ、鍛冶炉・炭窯・住居跡等、鉄生産に関する一連の遺構を検出するとともに、須恵器生産も行っていたことが明らかとなった。また、冶金学的分析の結果、奈良時代後半においては、原料(砂鉄)—製鉄—精練鍛冶—鍛練鍛冶—製品という一貫した生産体制であったことも明らかとなった。

国内での鉄生産開始時期については、現在までのところ6世紀後半には西日本を中心に箱形炉と呼ばれる製鉄炉が砂鉄・鉄鉱石を原料として操業されていたようで、数例確認されており、O地区の製鉄炉も新資料の一つとなった。これより遡る時期の製鉄炉の実証は、資料性に乏しいが、いろいろな見解が出されている北九州市潤崎遺跡(5世紀後半)の祭祀土坑出土鉄滓や、J・P地区の問題を取り上げると、鉄生産開始時期を考える上で重要な問題を提起したといえる。

丹後では鉄滓の出土した遺跡としては、10数例確認されているが、時期不明のものが大半である。

そのうち、調査により確認された丹後で最も古い鉄関係資料は、中郡峰山町扇谷遺跡(弥生時代前期末～中期初頭)から鉄斧・鍛冶滓が出土しており、二重に巡らした深い環濠を掘るために鉄製の道具を使用したのではないかと考えられている(鍛冶生産の開始)。

遠所遺跡群調査中に、周辺を広範囲にわたり踏査、聞き取り調査を行った結果、かなりの製鉄遺跡が存在することが明らかになってきた。新しく発見された製鉄遺跡は、製鉄(製錬)と思われるものと、鍛冶工程と思われるものがあるが、なかには分析を行ってみたいとわからないものもある。現在までのところ、古代の製鉄遺跡が存在する場所は、野田川、竹野川、福田川水系に限られるようであるが、遠所遺跡群を含めて最低15か所の製鉄遺跡が存在するようである。その他、発掘調査により数は少ないが古墳に副葬、供献された鉄滓や集落遺跡から出土する鉄滓の例も増えつつあるが、分析を行ってみたいと製錬滓か鍛冶滓かは不明である。このように、製鉄に関係する資料が増加し、丹後も古代では有数の生産地であった可能性が生じてきた。

最近、朝鮮半島南部、慶州市隍城洞遺跡(4～5世紀の製鉄一貫体制のとられた遺跡、原料は砂鉄と鉄鉱石)が発見され日本海沿岸部に関心が向けられることになった。このことや、峰山町扇谷遺跡のことなどを考えると、日本での鉄器の使用と、鉄生産(製鉄)を始める時期と場所を考える上で、遠所遺跡群は重要な資料を提供するものといえる。

(ますだ・たかひこ=当センター調査第2課調査第1係主任調査員)

注1 増田孝彦「遠所古墳群の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第31号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989.3

注2 増田孝彦「遠所遺跡群出土の銅鉄」(『京都府埋蔵文化財情報』第36号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990.6



B地区全景(奈良時代後半の遺構面)南から

(7ANFKE-2 · FIR-1)

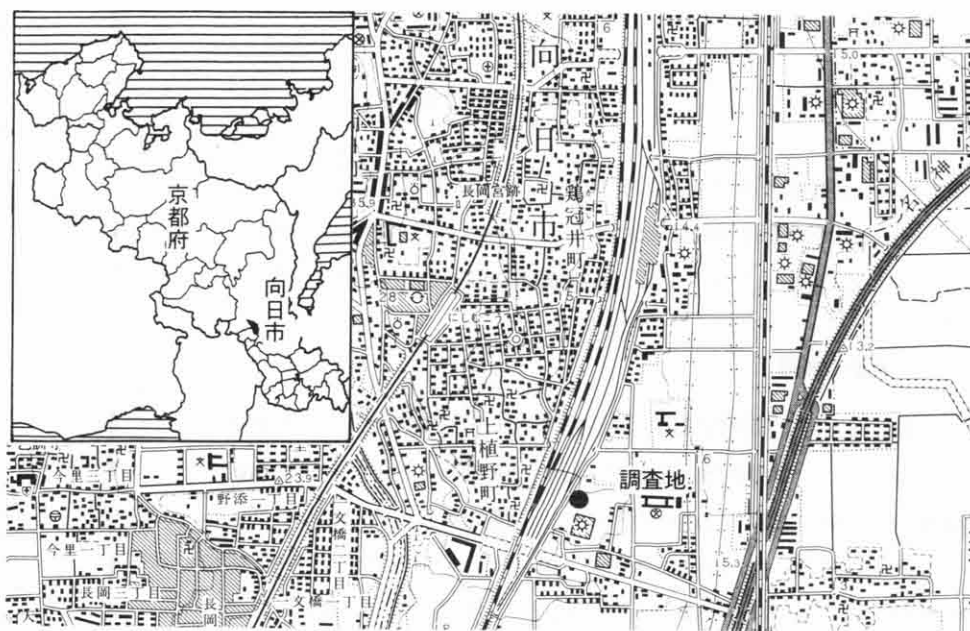
中 川 和 哉

1. はじめに

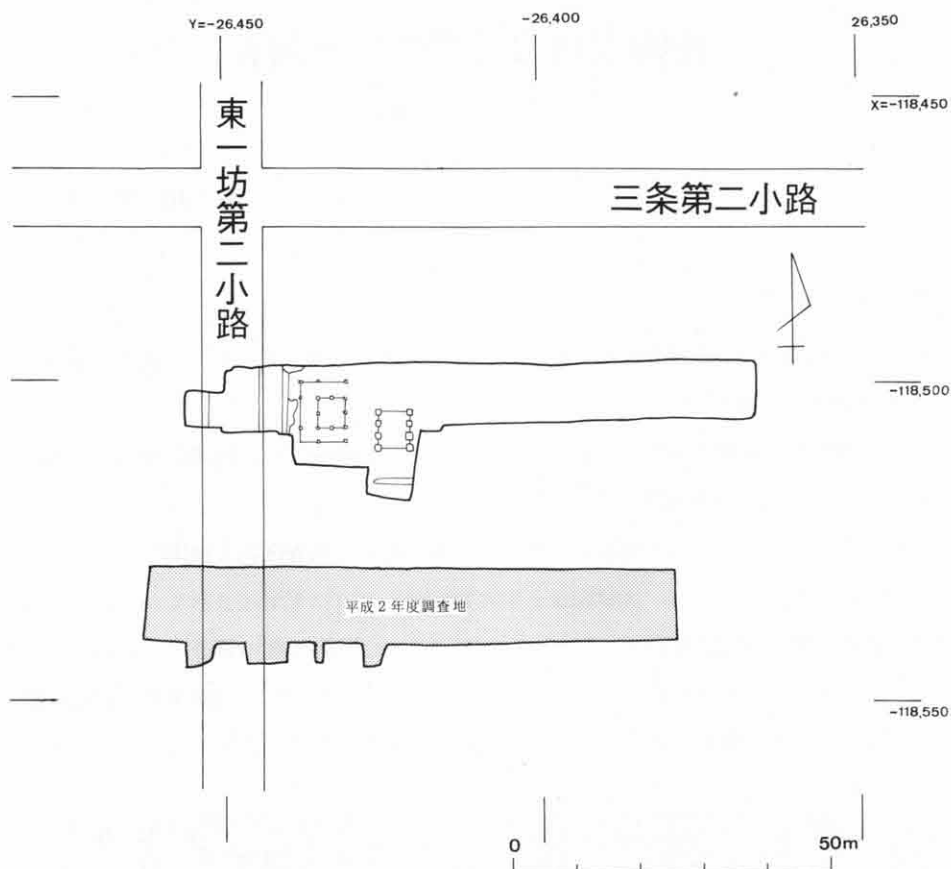
今回の発掘調査は、昨年度に引き続き向日合同宿舎の建設に先立ち、大蔵省近畿財務局の依頼を受けて実施した。

この調査地は、京都府向日市上植野町車返し・池尻に所在する。従来の長岡京の条坊復原案によると、左京三条一坊十二・十三町にあたる。

昨年度の調査により、東一坊第二小路の両側溝の続きが調査区内で検出できるものと考えられた。調査区の周辺は、大規模な土地の造成によりほぼ平坦にされているが、今回の調査区は微高地の縁辺に位置している。今回の調査では、昨年度の調査では認められなかった平安時代の掘立柱建物跡・溝・土坑等の遺構を多く検出した。近接する中福地遺跡の発掘調査では、平安時代の遺構・遺物が比較的多く検出されていたが、周辺で今回のよう



第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 トレンチ配置図

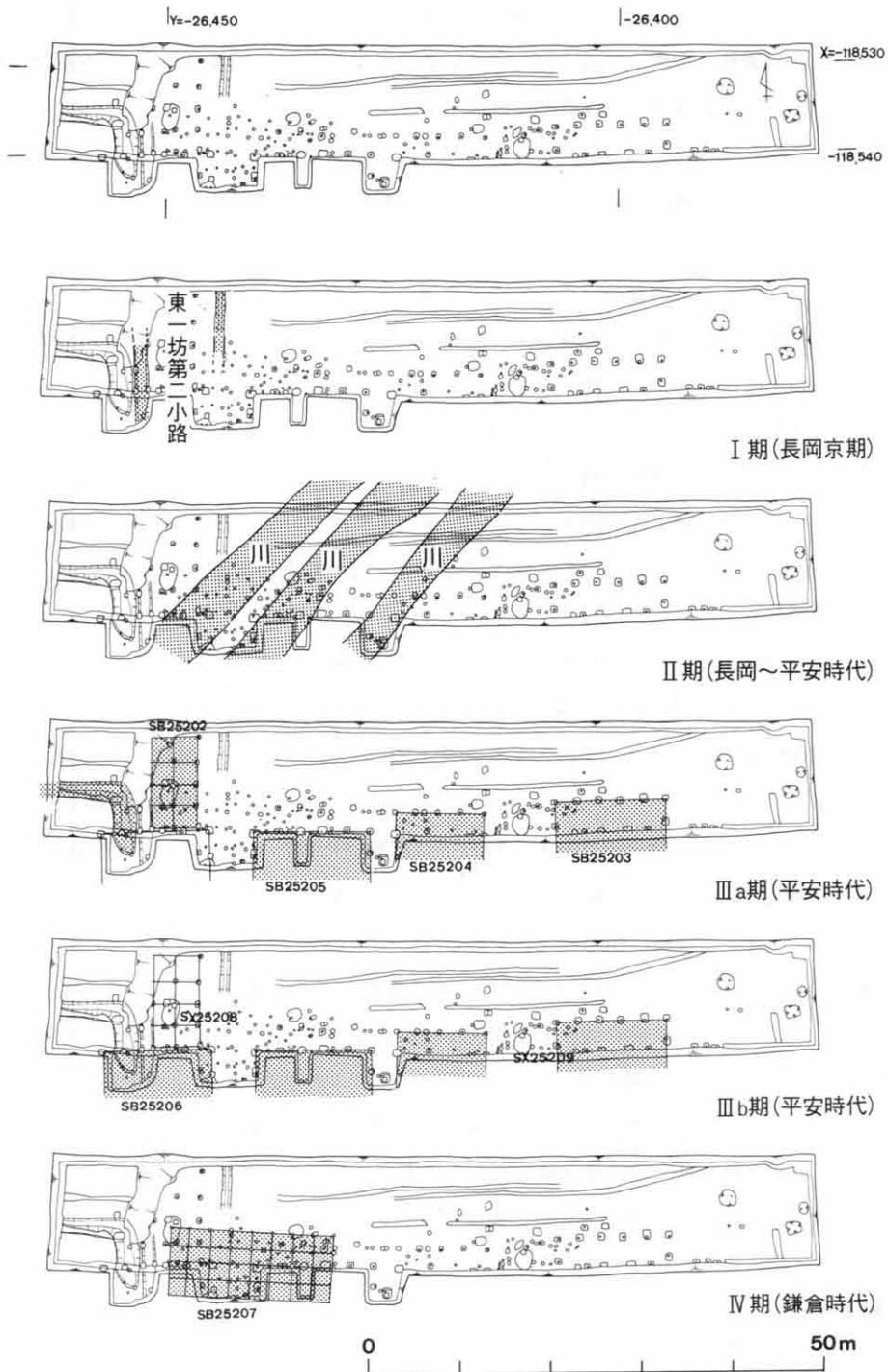
な大規模な建物跡がまとまって発見されたのは初めてのことである。

なお、今回の調査は平成2年8月6日～同年12月21日の期間を要した。期間中には、(財)向日市埋蔵文化財センターをはじめ関係諸機関の協力を得た。

2. 調査の概要

調査区内では古墳時代以前、長岡京期、平安・鎌倉時代、中・近世の4つの遺構検出面が認められた。古墳時代以前と考えられる遺構面からは、杭列を検出した。長岡京期の遺構面からは東一坊第一大路の両側溝と、側溝を切るものを含む自然流路を検出した。平安・鎌倉の遺構面では、掘立柱建物跡・溝・土坑が検出できた。中・近世の遺構面からは、中世の東西方向の素掘り溝、近世の水田の字境溝が検出できた。

以下は、主に平安・鎌倉時代の遺構面で検出した遺構・遺物について説明を加えたい。



第3図 遺構変遷図

平安時代

溝SD25201は、「L」字状に曲がる幅2mの溝で、南端はしだいに浅くなり調査区内で終わる。断面の観察から溝は二段に掘られていたことがわかった。溝の南肩は部分的に整地層になっており、整地層からは長岡京前後と考えられる遺物が出土している。また、この溝の東西方向の部分は断面の観察から、旧地表面の傾斜変換部に並行するように掘られている。埋土内の出土遺物には土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦が出土している。瓦には軒平瓦、平瓦、丸瓦がある。軒平瓦は唐草文が施された小型のものが多く認められる。平瓦、丸瓦もまた法量の小さいものが主体を占める。

掘立柱建物跡SB25202は、東西2間・南北4間の総柱建物跡である。南北方向の柱間は北端のものが他に比べ長い。柱穴の1つから礎石状の凝灰岩の切り石が出土している。

掘立柱建物跡SB25203は一辺が60cm前後の方形掘形をもつ東西5間、南北2間以上の規模の建物跡である。東西の柱間は2.4m・南北の柱間は2.7mである。掘形内からは数種類の平安時代初期の軒平瓦が出土している。瓦のすべてが平安宮内の主要な建物跡から出土した例が認められるもので、生産地は大阪府吹田市の喜志辺瓦窯、京都市の西加茂角社西群瓦窯である。

掘立柱建物跡SB25204は、柱掘形が40cm前後の建物跡で、南北1間以上・東西4間規模である。柱間は東西2.4m・南北2.4mである。

掘立柱建物跡SB25205は、東西5間・南北1間以上の建物跡で、掘形は一辺約80cmと今回検出した建物の掘形としては最も大きい建物跡の一つである。東西の柱間は2.7mである。柱穴のなかには凝灰岩切り石が柱の下に礎盤状に置かれたものや、径20cm前後の自然の垂角礫を底部に方形に組んだもの、数個の垂角礫が入ったもの等がある。掘形内の出土遺物には瓦、土師器、須恵器などである。

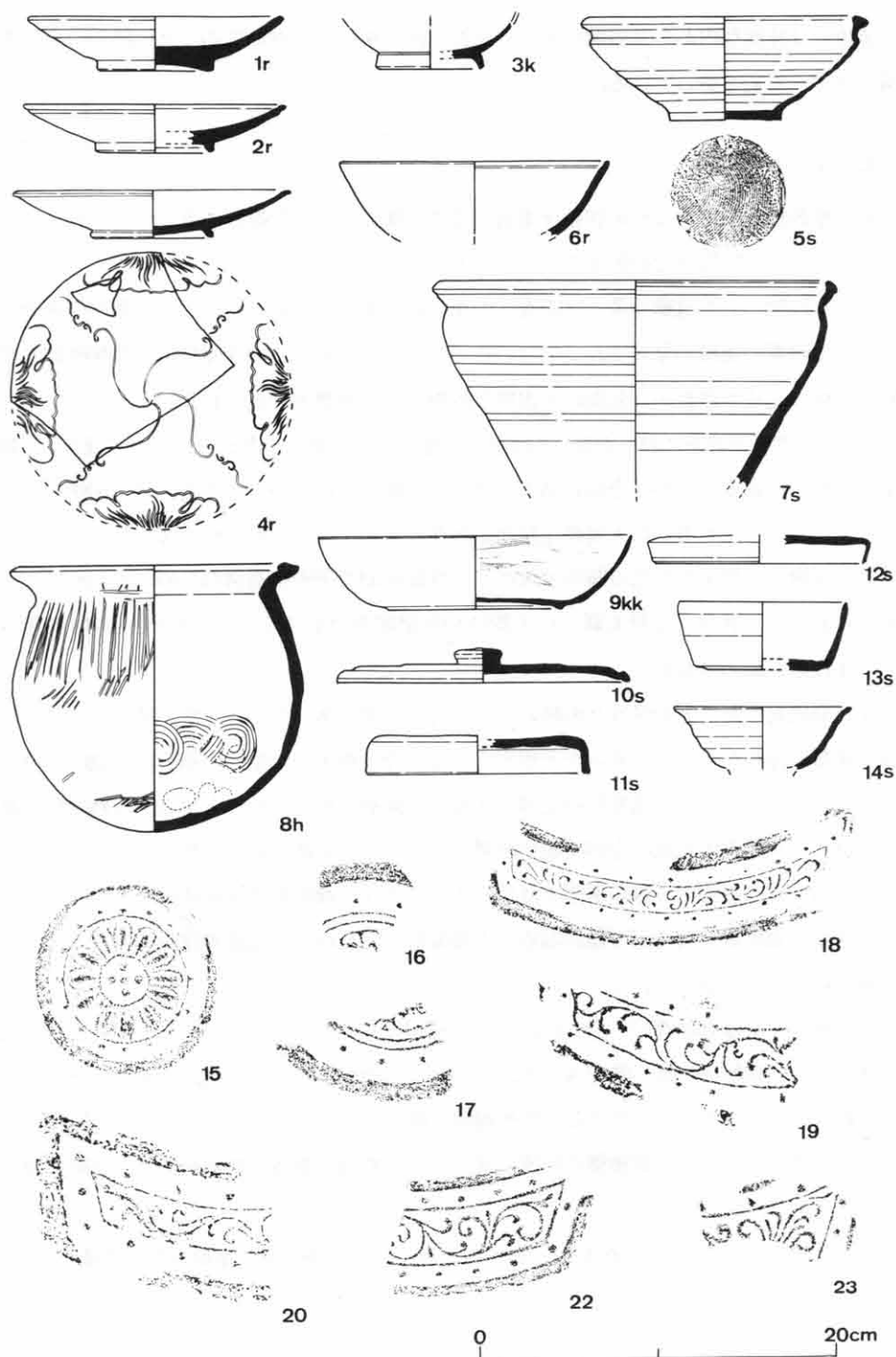
掘立柱建物跡SB25206は、80cm前後の大型の掘形をもつ建物跡である。柱穴には凝灰岩を含むものがある。遺構の切りあい関係からSD25201が埋没した後の建物跡である。東西5間、柱間は2.1mで東端の柱間は3.0mである。

土坑SX25207は、炭を多く含み、検出面からの深さが約10cmの浅い土坑である。出土遺物には小型の軒丸瓦、猿投産と考えられる内面に印刻花文の施された緑釉の皿がある。

土坑SX25208は、炭を含む土坑で、検出面からの深さは約20cmを測る。埋土から火を受けた瓦、凝灰岩、完形の土師器甕が1個体出土した。

鎌倉時代

掘立柱建物跡SB25209は、直径20～30cmの円形の柱穴をもつ東西8間・南北4間以上の総柱建物跡である。柱間は東西2.2m・南北2.0mで建物の軸は北で東に振れている。出



第4図 遺物実測図

1～3 : SD25201 4 : SX25207 5 : SB25205 6・7 : SB25202 8 : SX25208 10～14 : 整地層中
h : 土師器 s : 須恵器 r : 緑釉 k : 灰釉 kk : 黒色土器

土遺物には柱掘形内から瓦器碗がある。また、同一検出面において切りあい関係のある遺構にはすべて切り勝っている。

3. ま と め

現在整理作業中であるため詳細な遺構・遺物の検討は正式な報告に譲るが、これまでにわかったことと問題点を指摘することでまとめたい。

1, 今回検出した遺構の多くは調査区の南半から検出していることと、昨年度の調査区内でこの時期の遺構が発見されていないことを考えあわせると、今回検出した建物跡は建物群全体の北辺の建物か、北側に大規模な広場を持つ建物と考えられる。

2, 長岡京が平安京に移った後、長岡京の跡地が官司や個人に与えられたとの記載が『類聚三代格』にある。しかし今回の調査によって長岡京の跡地がすべて荒れ野や田畑になったのではなく、瓦を用いた大規模な建物が存在していたことが明らかとなった。

3, 遺構から出土した瓦の製造年代は、9世紀初頭で平安京造営のために造られた瓦と考えられるが、共伴する最も新しい土器は10世紀前半のものであり、瓦と土器に100年以上の年代差が認められる。

4, 凝灰岩や瓦に火を受けた形跡があることや、炭を多く含んだ土坑、拡張区で認められた炭層の存在から火災があったと想定できる。今回検出した建物の掘形内に焼けた遺物が含まれていることと、調査区の北側の拡張区で炭層を検出したことから、自然地形が高くなっていく調査区北側に今回の建物跡群に先行する建物跡があると想定できる。

5, 出土した遺物が一般の集落では用いることのない凝灰岩や瓦を使用しており、土器にも篠産の須恵器、猿投産の緑釉陶器・灰釉陶器、京都市の小塩産の緑釉陶器など多くの産地からのものが認められる。

今回検出した建物跡群のいくつかには瓦が葺かれていたものと考えられるが、平安時代に瓦を用いた建物は性格が限定される。しかも1次的であろうと2次的であろうと平安京の創建瓦をもちいることのできる人物や機関は限られるであろう。今回検出した建物の具体的な性格については、遺物整理作業の進展と周辺の調査事例の増加を待って将来の課題としたい。

(なかがわ・かずや=当センター調査第2課調査第3係調査員)

平成2年度発掘調査略報

10. こくばら野遺跡

所在地 熊野郡久美浜町字甲山小字古君原野

調査期間 平成2年7月26日～12月13日

調査面積 約800m²

はじめに こくばら野遺跡は、久美浜湾にのぞむ標高11m前後の海岸段丘上に位置する。付近には長良遺跡、日光寺遺跡、浦明遺跡などの集落遺跡が段丘上に点々と分布しており、当遺跡も集落関係の成果が予想された。今回の調査は、国道178号バイパスの建設に先立って行った試掘調査である。

調査概要 A地区、B地区、C地区の3か所を調査した結果、最も顕著な遺構を検出したA地区について簡単に報告する。検出した主な遺構は、竪穴式住居跡11棟、掘立柱建物跡1棟以上、及び土坑、溝などである。竪穴式住居跡は、いずれも隅丸長方形プランで、規模は短辺4m×長辺4.5m程度のもの、短辺3.5m×長辺4m程度のもの、短辺、長辺とも3m足らずのものの3種類がある。これらは、周壁溝を持たず、東辺に造り付けの竈を持つことを通例とする。住居廃絶時の遺物は残されていないが、埋土中の出土遺物より、これらの住居跡の年代を7世紀末から8世紀初頭頃に比定することができる。掘立柱建物跡は南北棟1棟だけを復原しているが、他にも数棟の南北棟が復原できるものと思われる。これらの建物跡のピットには、竪穴式住居跡の埋土を切っているものがあることなどから、8世紀前半の建物跡と考えられる。

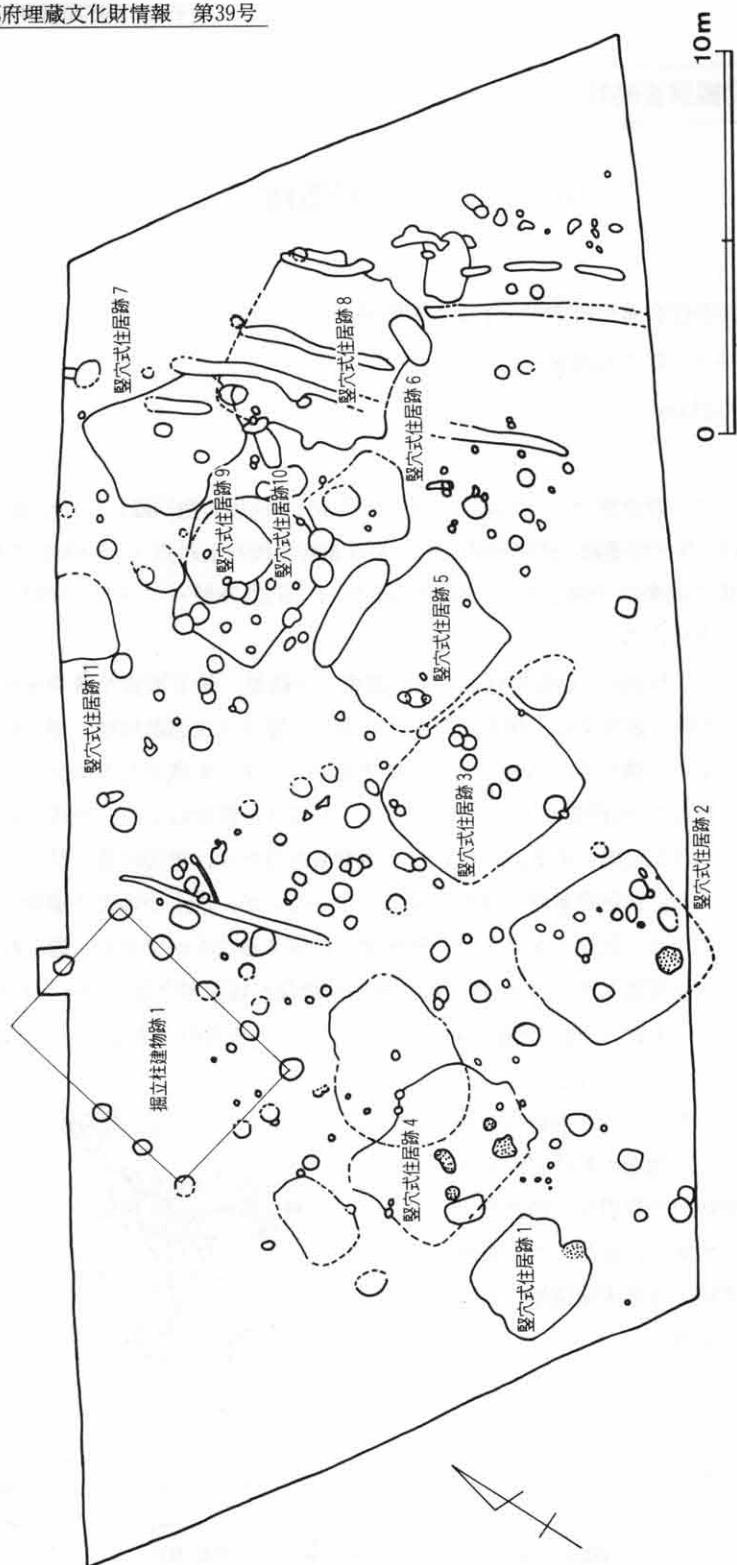
まとめ 今回の調査では、8世紀代の集落跡が発見され、この地域における竪穴式住居から掘立柱建物への住居形式の変化の一端を窺うことができた。また、この遺跡の集落は、長良遺跡、日光寺遺跡等で発見された8世紀代の集落とともに、丹後国熊野郡田村郷を構成する集落のひとつと思われる。集落相互の関係、集落成立の背景等、律令制成立期の集落の実態を解明する上で貴重な資料となるものである。

(森島 康雄)



第1図 調査地周辺遺跡分布図(1/50,000)

1. 日光寺遺跡 2. 長良遺跡 3. こくばら野遺跡
4. 浦明遺跡 5. 雲晴遺跡



第2図 こくばら野遺跡遺構平面図

11. 内和田古墳群

所在地 与謝郡加悦町字明石

調査期間 平成2年7月17日～10月19日

調査面積 約680m²

はじめに 今回の調査は、一般国道176号の道路新設事業に伴い京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。内和田古墳群は、野田川中流域東側の低い独立丘陵上に位置する。この丘陵上には、従来の分布調査によって15基の小古墳の存在が確認されていた。このうち北尾根の12基を内和田古墳群、南尾根の3基を嶋古墳群としている。今回の造成に係り、調査範囲となったのは2号墳の一部及び3～6号墳である。しかし、結果的には、3・6号墳は古墳として認められず、自然地形であることが判明した。このため、2号墳の南裾部の区画溝及び、4・5号墳2基の調査を行ったこととなる。

調査の概要

2号墳 墳丘南側裾部分のやや平坦な地点では、尾根筋方向に直交する直線的な溝を検出した。これは墳丘成形の際に掘削されたものと考えられ、断面は底がやや丸みを帯びた「V」字形を呈する。埋土中からは、中段階に比定できる布留式土器片等が出土した。

4号墳 5号墳北側尾根上に位置する。尾根筋を削りだし、東西6m・南北3mの平坦面を造成し、この中心に箱形木棺を内部主体とする埋葬施設を1基設けている。墓壇上面には供献土器とともに、2点の銅鏃が置かれていた。墓壇内からは、鉄剣1口が出土した。

5号墳 4号墳の上方に位置し、丘陵方向に直交する幅約3mの溝によって墓域を区画している。墳形はいびつな長方形を呈しており、平坦面上に16基の埋葬施設を設けている。墳丘は、地山成形によっており明確な盛土は行っていない。墳丘裾部は明瞭でない。埋葬施設には、木棺墓と土壇墓があり、鉄剣・鉄刀・鉈・鉄鏃などの鉄製品が若干副葬されていた。また、墓壇上面には、供献土器が置かれているものがあり、特に中心の第1主体では、壺・器台・高杯等の土器が良好な状態で残存していた。これら主体部の大半は、古墳時代前期に位置づけられるものである。また、



調査地位置図(1/50,000)

主体部の中には弥生時代後期に属するものがあり、古墳築造以前には弥生時代の墳墓地として利用されていたことが判明した。

(森 正)



内和田5号墳全景(南東から)

12. 田中西遺跡

所在地 舞鶴市泉源寺766

調査期間 平成2年10月2日～10月31日

調査面積 約500m²

はじめに 田中西遺跡は、東舞鶴市街地の北東近郊にあり西流する志楽川下流域に位置している。隣接する泉源寺遺跡は1987年に当調査研究センターが調査を行い、6世紀後半代の横穴式石室などが検出されている。京都府教育委員会作成の『京都府遺跡地図』では田中西遺跡は奈良時代から平安時代の遺跡と考えられている。

調査概要 今回の調査は府立東舞鶴高校敷地内のプール造成工事に伴う事前調査として京都府教育庁管理部の依頼で実施された。

調査はプール造成地に幅約9m・長さ約45mの南北に長い「L」字形のトレンチを設定し、地層断面の観察を行いつつ、重機による掘削を行った。最も遺物を包蔵する可能性が高いと考えられた暗黒褐色粘土層(標高約5m)より人力によって遺構の検出を行ったが、遺構や土器などの遺物も検出できなかった。トレンチ内の断面観察では粘土層や川原石の混じった砂礫層が南東方向に向かって緩やかに傾斜して堆積しており、河川の活動による水成堆積と洪水などによって運ばれた礫層とが、交互に一部攪乱を起こしつつ堆積したと考えられた。これらの砂礫層や粘土層が堆積した時期は、遺物・遺構等が遺存しなかったため不明であるが、前述した泉源寺遺跡の遺構検出面が標高14mほどであったのに対し、今回調査地の掘削開始面が標高6mほどであったことから、遺物包含層がすでに削平されている可能性が高いと思われる。

まとめ 今回調査地の堆積層は、古墳時代以前の時期に形成されたと推測できる。現在、周辺の宅地が立地している面は南側にかなり傾斜しており、遺跡は今回調査地よりも北東に位置する丘陵裾部分に遺跡が遺存する可能性が高いものと思われる。

(野島 永)



調査地位置図(1/50,000)

13. 蒲生遺跡第4次

所在地 船井郡丹波町豊田

調査期間 平成2年9月19日～11月8日

調査面積 約350m²

はじめに 蒲生遺跡は、曾根川と須知川に挟まれた台地上に立地する集落遺跡で、京都府立須知高等学校を中心とする広がりをもっている。須知高等学校内では官舎増築に伴い、これまで3回の発掘調査が実施され、弥生時代中期の竪穴式住居跡や古墳時代の土坑、中世の掘立柱建物跡などが検出されている。今回、遺跡の推定範囲内に体育館が新築されることになったため、当調査研究センターでは京都府教育委員会の依頼を受けて、発掘調査を実施した。

調査経過と概要 調査にあたり、まず試掘トレンチとグリッドを各所に設けて遺構・遺物の有無と分布状況、土層の堆積状況を確認した。土層は、整地層(表土)直下に漸移層があり、その下に黄色粘質土が60～70cmの厚さで水平堆積していた。黄色粘質土は、色調によって三つに分層できる。火山灰起源の土壌である可能性が高い。この層は、これまで「地山」として処理されてきたが、今後の調査においては更新世の文化層を包含する可能性も含めて留意しておく必要がある。遺構・遺物は、全体に削平を受けていることもあって希薄であった。

①**検出遺構** 調査対象地北西端で検出した掘立柱建物跡が唯一の遺構である。南北に主軸を持つ梁間4間・桁行5間の建物跡である。柱間は約180cm(6尺)等間で、柱穴は円形である。柱穴からの出土遺物はなく、時期は明らかではない。



調査地位置図(1/50,000)

②**出土遺物** 整地層から須恵器片・敲石、柱穴から石核が出土している。石核は、節理面に沿って割れたチャートの円礫を用いたもので、縄文時代のものとみられる。敲石は大型蛤刃石斧の折損品を転用したものである。須恵器は、甕と杯身の細片が数点ずつ出土している。いずれも、6世紀前半に位置づけられる。
(田代 弘)

14. 長岡京跡右京第363次(7ANNKN-5)

所在地 長岡京市友岡一丁目

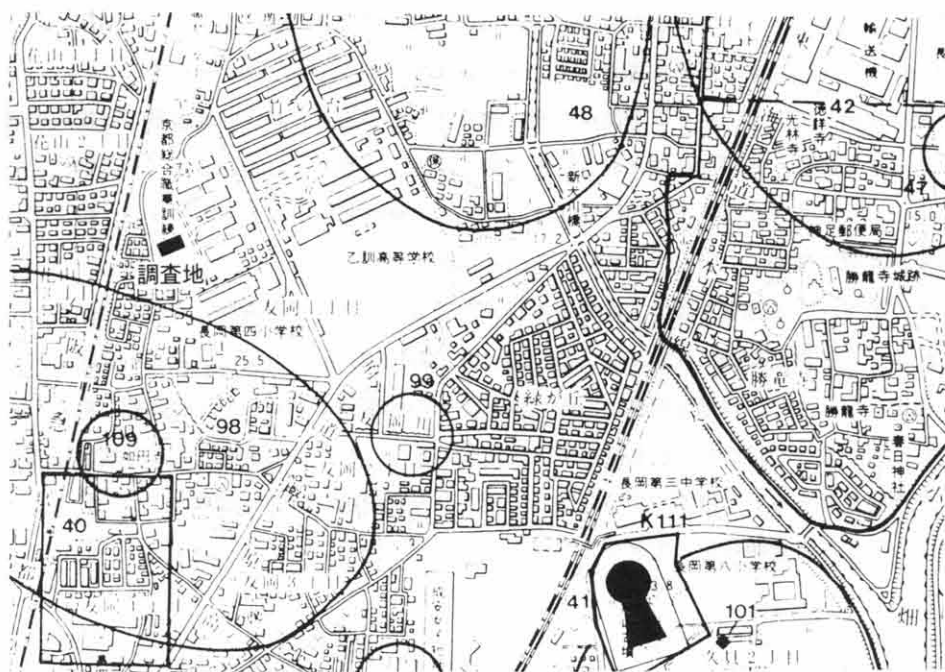
調査期間 平成2年10月22日～平成3年1月25日

調査面積 約600m²

はじめに 今回の発掘調査は、京都技能開発センター体育館建設工事に伴い、雇用促進事業団京都技能開発センターの依頼を受けて実施したものである。

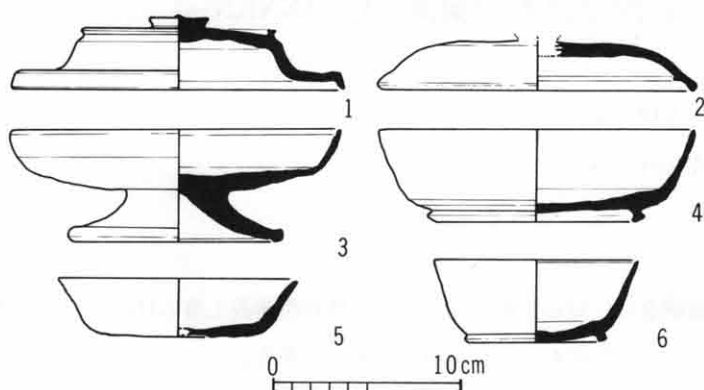
調査対象地は、長岡京条坊復原図によれば右京七条三坊一町の推定地にあたり、地形的には北西から南東へのびる舌状の丘陵端部に位置している。京域内に張り出している丘陵部が、どのように利用されたのかを知る上で重要であるとともに、調査対象地の南方には友岡遺跡が広がっており、その範囲を確認するうえでも注目された。また、南方に位置する鞍岡廃寺と関連する遺構の検出も予想されたところでもある。

調査の概要 調査地は、北東方向に傾斜する地形を呈しており、7世紀後半から9世紀



第1図 調査地位置図(1/10,000)

40：鞍岡廃寺跡 41：恵解山古墳 42：勝龍寺城跡 43：開田遺跡 98：友岡遺跡 109：友岡城跡



第2図 SD36304出土土器実測図(1/4)

後半にかけての遺物包含層が比較的厚く堆積している。また、トレンチ北東端は、先述した傾斜面よりさらに急に落ち込んでおり、中世の遺物を含む包含層と焼土と炭層を

埋土とする焼土坑SK36306を検出した。検出した遺構は、溝・土坑・井戸・柱穴などであるが、遺構の密集度は低く、特に、トレンチ北西部は、後世の攪乱と削平のため明確な遺構は消失している状況である。

溝SD36302は、南北に走る断面「U」字形を呈する素掘り溝で、部分的に埋没した段階で蛇行するように掘り直している(SD36304)。この蛇行部分から第2図に掲載した須恵器群が一括で出土した。井戸SE36305は、溝SD36307を切り込んで掘られており、検出面下70cmまでは直径2.2mの円形に掘り込み、それ以下を一辺1mの方形に掘り込んでいる。井戸枠は検出していないが、下半部を方形に掘り込んでいる点と井戸内堆積層が黄褐色礫層であることから、井戸枠を抜き取ったとも考えられる。甕などの須恵器片と土師器片が少量出土したにすぎない。土坑SK36306は、トレンチ東端で検出した方形土坑で、焼土層と炭層が互層に堆積している。土坑内からは瓦器碗が出土している。

まとめ 今回の調査では、7世紀後半～9世紀後半にかけての遺物包含層を検出し、7世紀末から8世紀初頭に比定できる溝SD36302(SD36304)及び中世の方形焼土坑SK36306を検出した。また、時期を明確に設定できないものの溝SD36302とほぼ同時期と考えられる柱穴群や井戸SE36305なども確認することができた。これらの遺構は、調査地周辺の歴史的環境を考える上で重要であるばかりでなく、友岡遺跡の範囲が確実にこの丘陵にまで及んでいることを明らかにできたと言えよう。

(小池 寛)

15. 興戸遺跡

所在地 綴喜郡田辺町興戸
調査期間 平成2年4月24日～12月20日
調査面積 約2,300m²

はじめに 今回の発掘調査は、国道307号道路新設工事に先立つもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施したものである。発掘対象となった興戸遺跡は、田辺町の中央部にあり、昨年度までの調査の結果、縄文時代晩期から室町時代にかけての複合遺跡であることが判明している。今回は、昨年度(第6次)からの継続で、近鉄線から西へ府道八幡木津線までの区画を対象とした。

調査概要 興戸遺跡は、西端の丘陵裾から東端の水田地帯までの東西約600m・南北約750mの広大な遺跡で、この北部を東西方向に横断するトレンチを設定した。調査地は、JR線と近鉄線によって三分割されており、第6次は近鉄線以東の地を対象とした。第8次の前半は近鉄線とJR線に挟まれた地域で実施し、同後半はJR線以西～府道までの地域で実施した(第2図)。

第8次調査前半では、第5トレンチと第6-7トレンチの2か所を設定した。いずれも、中世の耕作に伴う溝の下に、奈良時代から平安時代前半の溝や井戸、掘立柱建物跡を検出した。特に、井戸は3基検出され、いずれも長岡京期頃に廃絶していたことと、廃絶時に斎串を使った祭祀を行っていたことが判明した。また、第6-7トレンチの中央では倉庫様の掘立柱建物跡1棟を確認した。更に、同一の方向性をもつ溝2条(SD8204・SD8235)と、これに直交する方向の溝1条(SD8183)を確認した。前記の溝の方向は、北に対して西へ約33度偏している。

この地域の出土遺物としては、奈良時代の土師器・須恵器を中心に、平安時代の緑釉陶器、鎌倉時代の青磁碗などである。このほか、斎串や製塩土器、かまどなども出土した。また、貨幣が1枚(神功開寶、765年初鑄)及び、「養」と墨書された土師器皿1枚が井戸SE8179から出土した。「東」と墨書された土師器皿1枚も井戸SE8142から出土した。

第8次調査後半では、第8トレンチと第9トレンチの2か所を設定した。他の地点と同じく、中世以降は耕作に伴う溝が確認された。第9トレンチの調査成果によれば、近世の耕作溝の方向は東西南北にはほぼあわせたものであるが、中世のそれは北に対して西へ約24度偏していた。これらの下層に、奈良時代から平安時代前半にかけての溝や、掘立柱建物

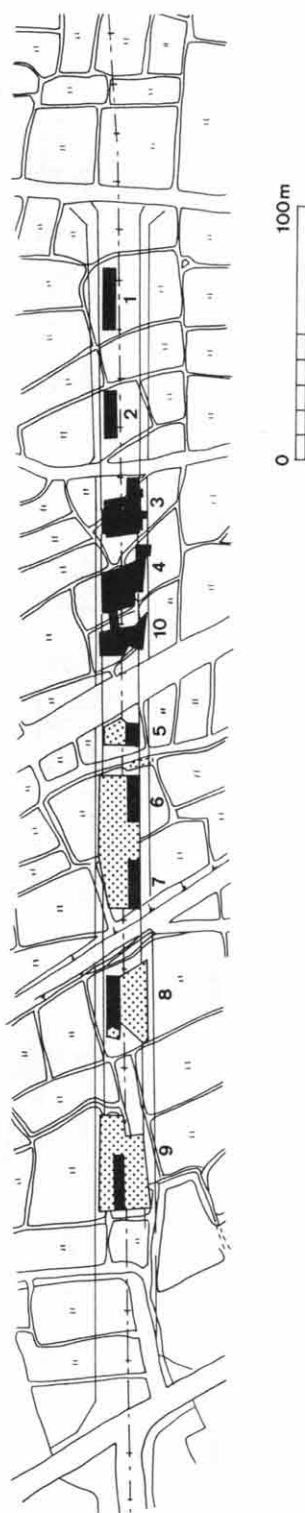
— 28 —

跡、柵列などが検出された。特に、第8トレンチ東南隅で検出された溝SD8385は、真西より南に約29度偏しており、第8次前半の調査で確認した方向に近似する。この溝の西方で、径50cm程度の土坑SK8301を検出した。この埋土の中には土師器杯1点を逆さに伏せて置いてあり、その下に貨幣(神功開寶と、萬年通寶、760年初鑄)10枚ほどと、ガラス小玉10点ほどが置かれていた。祭祀、おそらく地鎮祭に伴うものと考ええる。

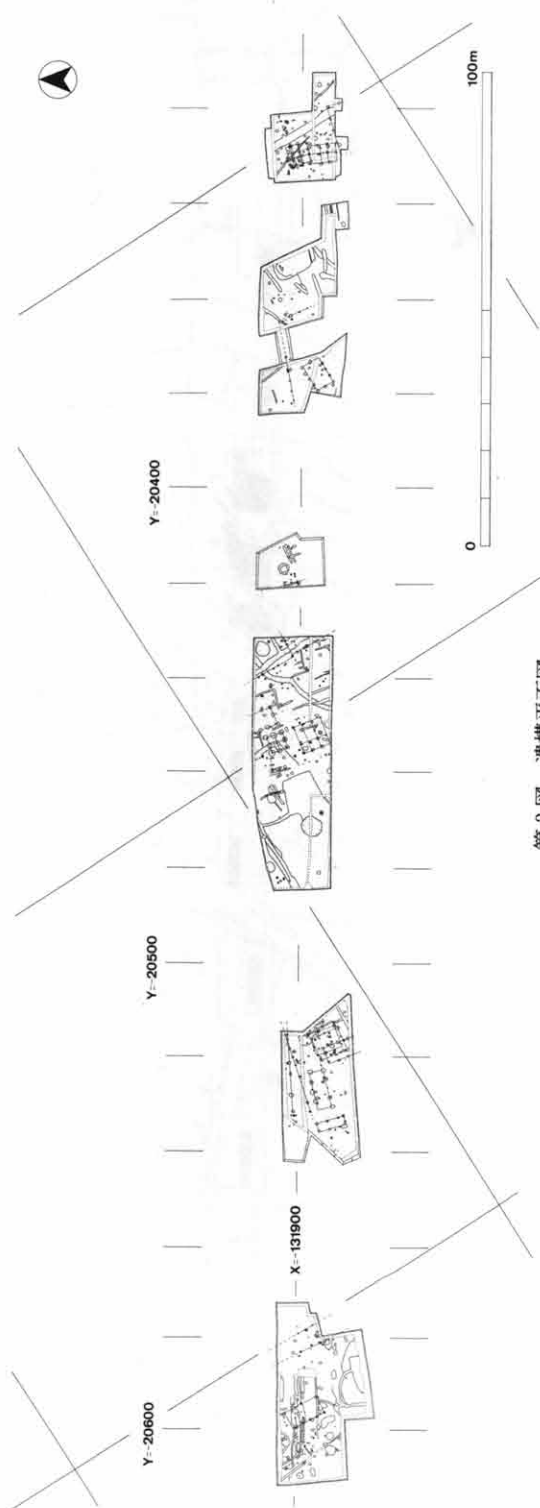
第9トレンチは、他のトレンチが黄褐色粘質土の比較的安定した地盤であるのに対し、ここは砂層や青灰色粘土層がベースとなっており、水が溜まりやすい、不安定な地盤であった。そこに、柵や掘立柱建物を設けていた。方向は北に対して西へ約33度偏している。

この地域の遺物としては、奈良時代の土師器・須恵器を中心に、平安時代の緑釉陶器や黒色土器碗・壺などが出土した。そして、特に第8トレンチでは数十点の瓦片(奈良時代か)のほか、弥生時代から古墳時代初期にかけての小型丸底壺が10点ほど出土したことが注目される。田辺町教育委員会が第7次調査を、このトレンチのすぐ北で実施されたが、そこでも弥生時代の遺物が出土している。

まとめ 今回の調査と前年度の調査



第2図 トレンチ配置図



第3図 遺構平面図

の成果を合わせてみると、特に奈良時代から平安時代前半にかけて、一定のまとまりのあることが判明した。すなわち、第1図のとおり、北に対して西へ約33度偏している方向性を考えてみると、いくつかの溝や柵列、井戸などが合致しており、そして、この方向は奈良時代の山陽道及び山陰道であるとする現府道八幡木津線(足利健亮説)と同じなのである。つまり、奈良時代頃にはこの方向性にとった地割りがあったと推定できよう。

今、仮に現在の道路の中心が奈良時代の官道の中心と同じとして、1町ごとに(1町は106.59mとする)割り付けてみると、このような方格地割りが復原できる。これをもとに、近隣の地割りを考えてみると、かなり長距離にわたって、官道に沿った地割りが実施された可能性が指摘できる(第2図)。

現在までの通説(谷岡武雄説)では、南山城の低地部にはほぼ東西南北に合った条里が奈良時代にあったとされているが、丘陵地に近いところでは道が推定されているだけで、地割りについては不明だったのである。それが、この周辺に道と同方向の地割りがなされていたことがわかり、より具体的に古代の景観が復原できることになった。

そして、前年度からの出土遺物から言えば、硯や斎串、緑釉・灰釉、墨書土器、瓦など一般集落ではほとんど出

土しないものがめだち、官衙的な建物のあったことがわかった。但し、これがただちに綴喜郡衙であるというわけではなく、古代の道周辺に点在した集落(あるいは建物群)の性質の一端を示しているとも考えられ、その点から言えば、古代の幹線道路周辺の景観復原に一石を投じることになった。

(伊野 近富)



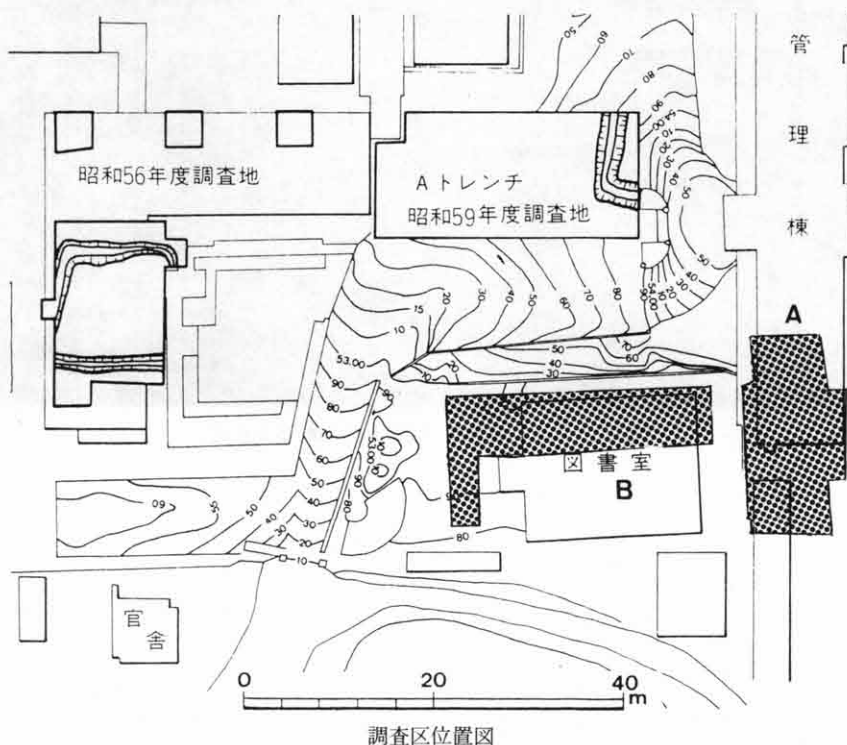
第6-7 トレンチ西部(方格地割の溝)東北から

16. 燈籠寺遺跡

調査地 相楽郡木津町大字燈籠寺小字内田山
調査期間 平成2年11月6日～平成3年1月22日
調査面積 約300m²

はじめに この調査は、京都府立木津高等学校の管理棟建設工事に先だって、京都府教育委員会の依頼を受けて実施した。木津高等学校地内は、燈籠寺遺跡・内田山古墳群の範囲の中心をしめ、昭和33年度の農地造成工事や、過去3回の発掘調査によって弥生時代から奈良時代に至る多くの遺構・遺物がみつまっている。とりわけ、古墳の発掘では大きな成果があり、方墳・円墳(5世紀前半)に伴い、埴輪や土器が出土した。^(注1) また、弥生土器の散布地としても燈籠寺遺跡は知られており、前期と後期の土器が採集されている。^(注2)

今回の調査で、弥生時代の遺物のみならず、方形周溝墓・竪穴式住居跡・土坑を検出した。さらに、古墳時代から中・近世にかけての遺物も出土した。



調査概要 調査地は、木津高等学校の正門を入ってすぐ東側であって、グラウンドに隣接する発掘区(A区)と、より正門に近い発掘区(B区)がある。B区は、古墳跡を検出した過去の調査地(56・59年度分)に近いことから、古墳跡の発見に期待がもたれたが、結果的に古墳跡はなかった。ただ、旧地形が南西方向の谷部に向かって傾斜していくところの包含層中から、弥生土器片、古墳時代の須恵器・埴輪片、奈良時代の土器などが少量出土したにすぎなかった。遺構としては、土坑2基・溝状遺構1条・柱穴痕2基(いずれも時期不祥)がある。

A区では、弥生時代中期前半を中心とする以下の遺構を検出した。

方形周溝墓 2基検出した。一つは、A区の中央でみつかったもので、一辺11mを測り、陸橋状の掘り残しが2か所で認められた。埋葬主体部は、溝の中でそれらしき四角形の掘り込みを1基検出した。遺物には壺・甕・高杯などがあり、これらから弥生時代中期前半の時期とみられる。

もう1基は、南辺の一部と西辺部を確認した。残存する深さは、約10cm程度である。切り合い関係から、こちらの方がより新しい周溝墓である。

堅穴式住居跡 柱穴痕が円形にめぐり、その内側の地面が比較的堅くしまっていることから、堅穴式住居跡と判断した。推定径はおよそ6.5mを測る。柱穴痕が方形周溝墓上にみられないことから、方形周溝墓に先行して建てられたことがわかる。弥生時代中期前半の時期である。

その他の遺構 柱穴痕・土坑・焼土坑がある。土坑は、明確には2基あり、形はいずれも不整形楕円である。中から、少量の土器や石器が出土した。焼土坑には、焼土・炭とともに土器も多く含まれ、炉のような施設になる可能性もある。これらも、弥生時代中期前半のものである。

まとめ 今回の調査では、主に弥生時代中期の方形周溝墓・堅穴式住居跡・土坑・焼土坑・柱穴痕(以上A区)、土坑・溝状遺構・柱穴痕(以上B区)を検出した。A区では、方形周溝墓に先行して堅穴式住居跡が営まれ、集落から墓域への移り変わりを知ることができた。B区では、明確に時期のわかる遺構はなかったが、弥生時代前期から中・近世に至る遺物が出土した。詳細については、今後改めて報告したい。(黒坪 一樹)

注1 大槻眞純「内田山古墳発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982、戸原和人・松井忠春・小山雅人「燈籠寺遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985

注2 平良泰久「考古編」(『木津町史—史料編—』 木津町史編さん委員会) 1984

資 料 紹 介

平安京跡左京一条三坊二町出土の朝鮮王朝陶磁器

引 原 茂 治

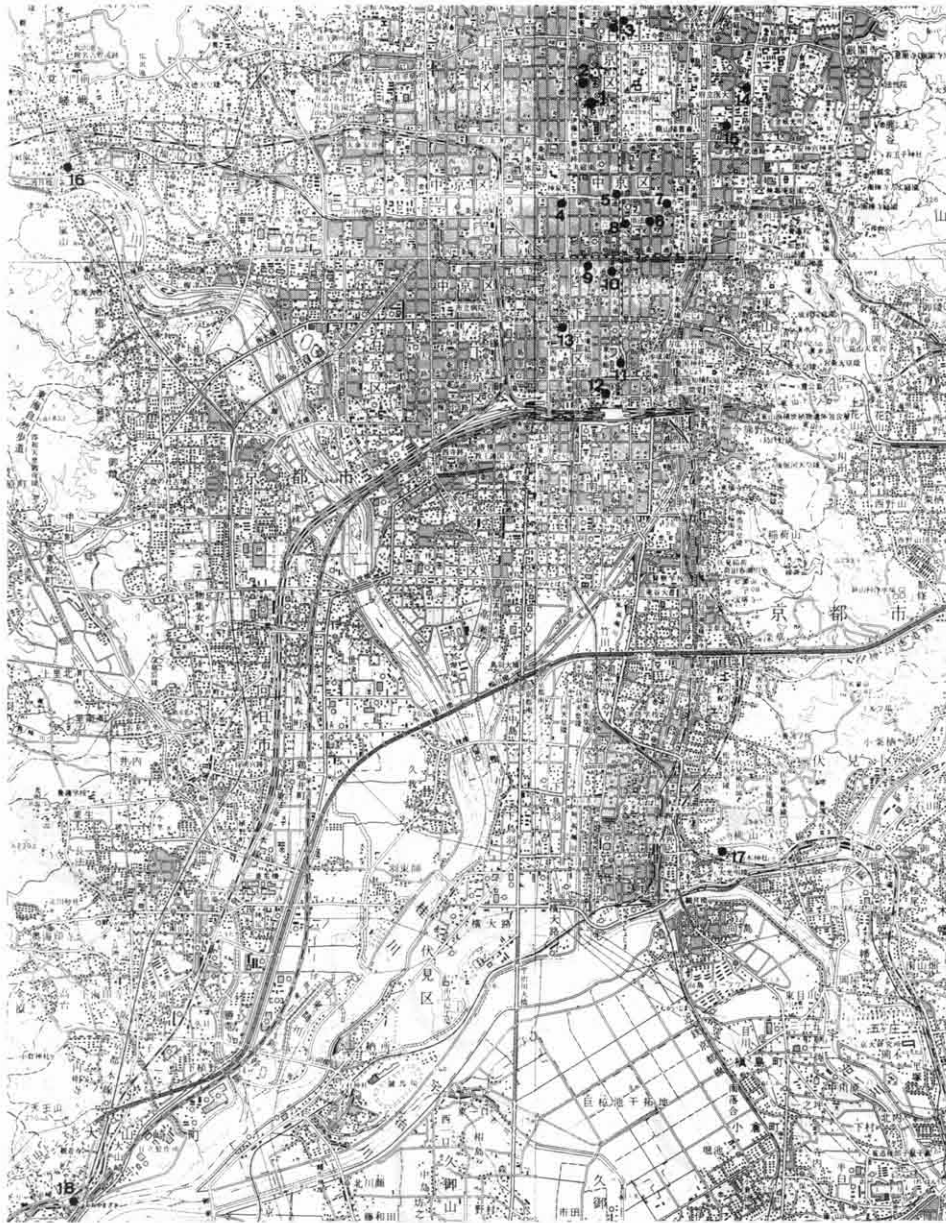
1. はじめに

今回紹介する資料は、昨年8月から本年1月にかけて調査を行った平安京跡から出土したものである。調査地は、京都市上京区の京都府庁内の北西隅に位置する。調査地は、主に平安京東二坊大路である西洞院大路の路面部分及びその東側の左京一条三坊二町の町部分にあたる。

今回の調査では、平安京の西洞院大路の東西両側溝や中世の溝・戦国期の堀などを検出しているが、最も多いのは近世の土坑である。江戸時代初頭頃には、付近に茶屋四郎次郎の邸宅があり、調査地周辺には、富裕な町衆が居住していたものとみられる。今回紹介する資料も、江戸時代初期の土坑から出土したものである。



第1図 調査地略平面図(近世)



第2図 高麗・朝鮮王朝陶磁器出土地位置図(1/100,000)

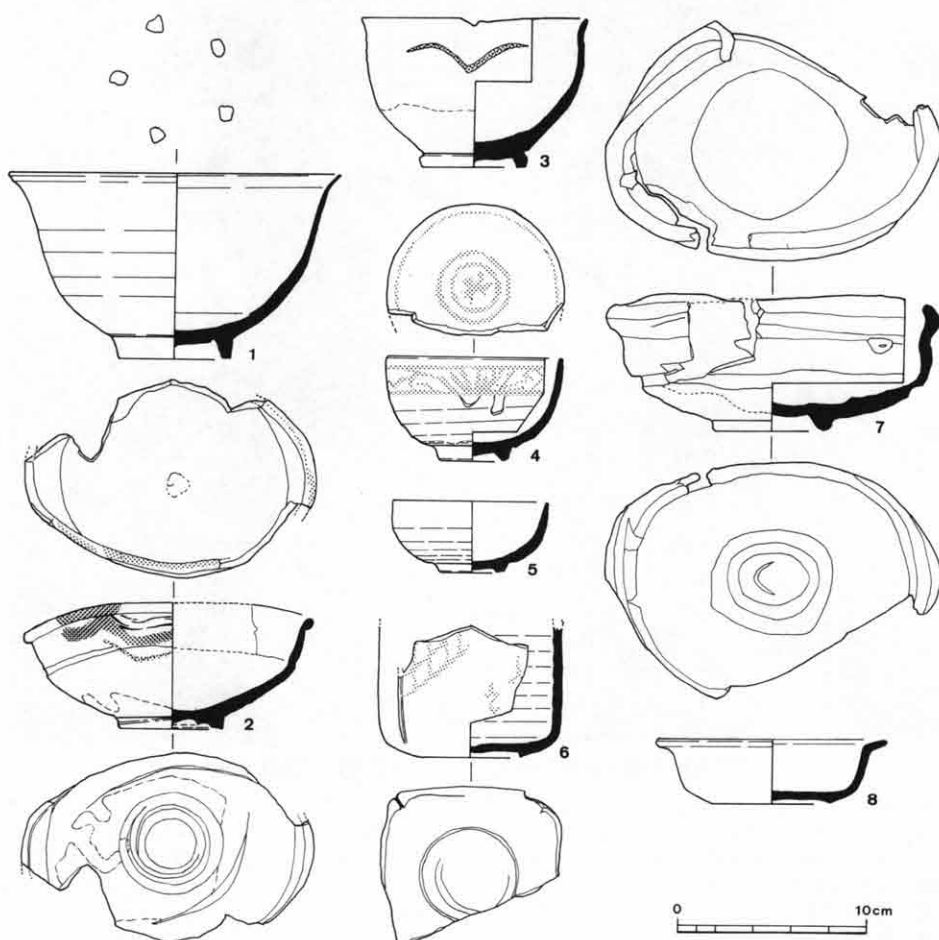
- | | | |
|------------------|-------------------|--------------|
| 1. 左京一条三坊二町(調査地) | 2. 左京北辺二坊八町小川御所 | 3. 室町殿 |
| 4. 左京三条二坊六町 | 5. 左京三条三坊十一町押小路殿跡 | 6. 三条柳馬場 |
| 7. 左京三条四坊十四町 | 8. 左京四条三坊十六町六角堂 | 9. 左京五条二坊十六町 |
| 10. 左京五条三坊十六町 | 11. 左京七条三坊十四町 | 12. 左京八条三坊 |
| 13. 本圀寺跡 | 14. 京都大学構内遺跡AP19 | 15. 白河北殿跡 |
| 16. 臨川寺 | 17. 伏見城跡下層 | 18. 山城国府跡 |

2. 出土した朝鮮王朝陶磁器について

今回の調査では、その可能性があるものも含めて、6点の朝鮮王朝陶磁器が出土している。内容は、白磁1点・粉青沙器2点・半磁胎の白磁3点である。この小文では、残存状態のよい白磁鉢と粉青沙器碗の2点を重点的に取り上げてみたい。

(1) 白磁鉢(第3図1)

この鉢は、口径17.6cm・高さ9.9cm・高台径6cmを測る深鉢である。逆台形状の高台から体部が内湾して立ち上がり、口縁端部は外反する。器胎は薄く整形されている。見込みには、高台径より大きい円刻(鏡)があり、その内側に5個の胎土目の目跡が並ぶ。使用に差し支えたのか、目跡には漆を詰めている。高台畳付以外は全面施釉する。色調は、灰



第3図 土坑125出土遺物実測図

1. 朝鮮王朝白磁 2・3. 肥前(唐津) 4～8. 美濃(志野・織部)

味をおびた白色である。高台際及び高台内では、釉のちぢれがあり、胎土が赤く発色している。なお、この鉢は、使用中に割れたものとみられ、漆継ぎの痕跡が残り、小片を欠失した部分には漆を詰める。また、内面はよく擦れて滑らかであるが、これが使用痕であるのか降りものなどを擦り落とした痕跡であるのかは不明である。

この鉢は、韓国国立中央博物館学芸研究室長の鄭良謨氏によると、高台が竹の節状になっていないことなどから、地方官窯の製品であろう、ということである。形態的に似たものは、大阪府大坂城跡・堺環濠都市遺跡などから出土している^(注1)。それらと比較して、この鉢は、腰部の張りが少なく、見込みの円刻も大きい。また、上記のとおり、目跡が胎土目であることなど、それらより古様を示す。

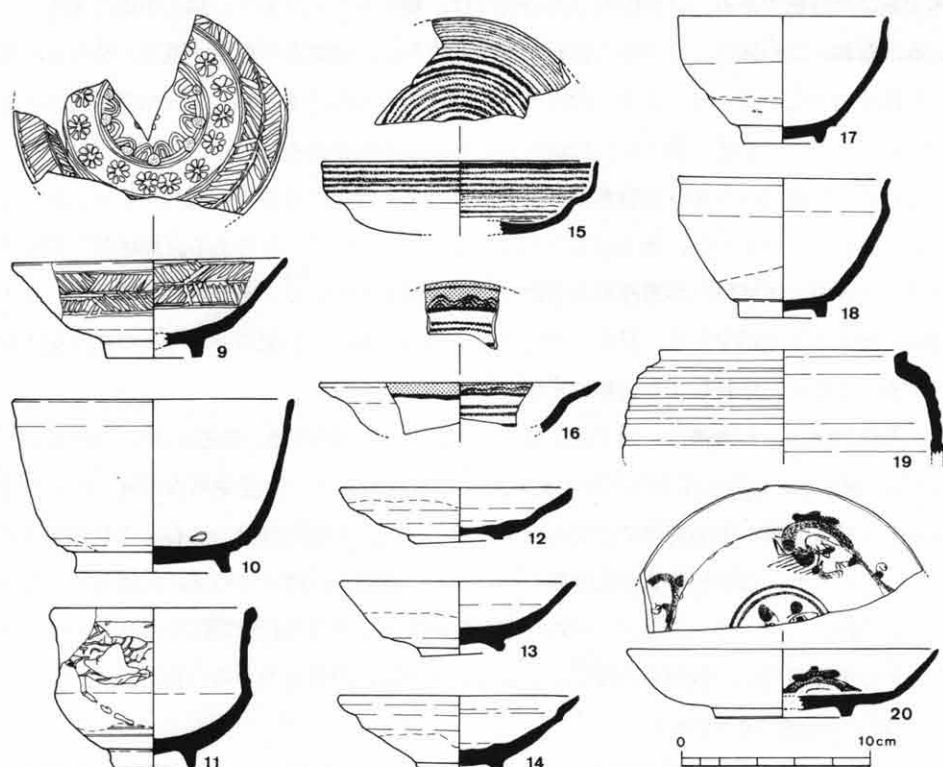
この鉢が出土した遺構は、地下式貯蔵穴とみられる土坑125で、長辺約2m・短辺約1.5m・深さ約1.2mを測る長方形土坑である。この土坑からは、美濃織部杓形碗・肥前唐津杓形碗・絵唐津碗・中国青花芙蓉手皿などが出土した。美濃陶器は、いわゆる登窯第Ⅰ期^(注2)のものとみられ、17世紀前葉頃に位置付けられる。遺構はほぼその時期に位置付けられるが、この鉢については、漆継ぎの痕跡などからみてある程度の伝世期間を考えるべきである。その製作時期は、韓国での編年によると、16世紀に遡るものとみられる^(注3)。

(2) 粉青沙器碗(第4図9)

この碗は、平碗に近い形態をもち、口径14.5cm・高さ5.25cm・高台径5cmを測る。いわゆる「彫三島」である。見込みには、中央に1個の花文を印刻していることが確認できる。その周囲に印刻花卉文を巡らす。この印刻花卉文の周囲に、残存している限りで、7個の小さい砂目の目跡がみられる。その周囲にさらに印花文を巡らす。この印花文は、中央のものと同一押し型を使用しているものと考えられる。体部内面及び外面には、檜垣文を巡らす。内面及び外面体部は厚く白土をかけるが、外面底部から高台にかけては軽く刷く。その上に、わずかに青味をおびた透明釉を全面施釉する。

外面形は、ゆるやかな傾斜をもつ底部から、体部が明瞭に屈曲して斜め上方に立ち上がっている。「彫三島」は、茶器として日本から注文されたものといわれているが、この碗は、朝鮮王朝陶器の形態をとどめている。「彫三島」の出土例は少なく、大阪府堺環濠都市遺跡や新潟県福島城跡などが知られるのみである^(注4)。福島城跡出土のものは、小片であり、形態は不明である。堺環濠都市遺跡出土のものは、丸みのある碗形で、この碗とは対照的である。このような形態の相違は、注文者の好みを反映したものか。

この碗が出土した遺構は、土坑16で、長辺約2m・短辺約1.6m・深さ約1.8mの長方形土坑である。近世西洞院通の路面東半部に位置しており、その性格は不明である。この土坑からは、多量の土器・陶磁器類が出土した。陶磁器では、美濃天目碗や肥前唐津皿が多



第4図 土坑16出土遺物実測図

9. 朝鮮王朝粉青沙器 10～14. 肥前(唐津) 15～18. 美濃(織部・天目) 19. 備前 20. 中国青花

い。また、美濃絵織部向付や肥前絵唐津鉢・中国青花皿などが含まれる。唐津皿は、胎土目の目跡をもつものが多いが、砂目の目跡をもつものもわずかにみられる。折縁皿はない。このようなことから、この土坑出土の肥前陶器は、肥前陶磁器編年のⅠ期からⅡ-1期^(注5)にかけてのものとみられる。美濃陶器は、登窯第Ⅰ期に位置付けられる。したがって、この土坑は、17世紀前葉頃のものとみられる。

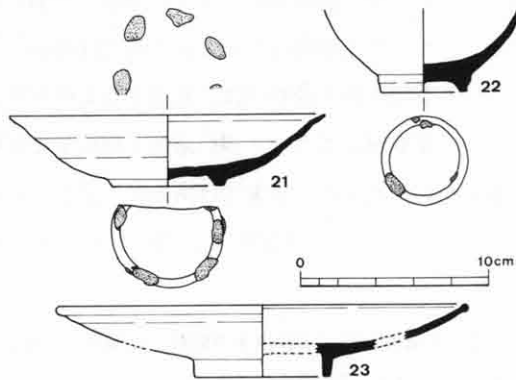
堺環濠都市遺跡・福島城跡出土のものは、17世紀初頭に位置付けられている。この碗もほぼそれらの時期と近い遺構から出土しており、この時期頃までにはすでに注文製作がされていたことを示す資料の一例といえる。

(3) その他(第5図)

粉青沙器は、瓶の体部と考えられるが、小片のため図示できない。外面には、暦文?・沈線を施し、白土を充填する。内面は、タタキ目を掻き消しており、無釉である。器胎の厚さは6mmである。16世紀戦国期の堀とみられる溝201埋土中から出土した。

半磁胎の白磁については、現時点では確実に朝鮮王朝陶磁器とは断定できない。胎土は、

白く精良で、黒色の微細砂粒がわずかに混じる。透明釉を全面施釉する。皿21は、土坑58から出土した。見込み及び高台畳付には砂目の目跡がある。碗22は、土坑84から出土したもので、高台畳付に砂目の目跡が残る。皿23は、重機掘削中に出土した。見込み及び高台畳付に砂目の目跡があるが、それを擦り落としている。なお、皿21・碗22は、17世紀後半頃の遺物と供伴する。



第5図 白磁実測図

21. 土坑58 22. 土坑84 23. 重機掘削中

3. ま と め

京都府内における、高麗・朝鮮王朝陶磁器の出土例については、百瀬正恒氏が集成して^(注6)おり、14遺跡があげられている。現状では少し増えて、18遺跡である。^(注7)大山崎町から象嵌青磁合子蓋が出土している以外は、ほとんど京都市内、それも平安京とその周辺部に集中する。しかし、そこで行われた調査の件数や出土遺物の量からみれば、ごくわずかなものである。まして、朝鮮王朝陶磁器に限れば、さらに少なくなる。このような出土傾向は、朝鮮王朝陶磁器が、実用的な必要性から輸入されたものではないことを示すものといえよう。朝鮮王朝陶磁器は、茶道と深い係わりがあるが、今回出土したもののうち、粉青沙器碗は言うにおよばず、白磁鉢も茶器とともに出土しており、茶碗ではないにしても茶道具として使用された可能性も考えられる。もっとも、伝世の茶器には、この白磁鉢のようなものはなく、茶道にふさわしくないものとして淘汰されたのか、あるいはもとから茶道とは関係のないものであったのか、その点は不明である。ただ、割れても漆継ぎをして使用されており、雑器でなかったことは推定できる。これは、多量に出土した美濃・肥前陶器に漆継ぎの痕跡がほとんどみられないのと対照的である。なお、京都においては、白磁の出土が目立ち、その用途は別として、これが京都の特色といえよう。

今回出土した粉青沙器碗については、茶陶であることが確実な朝鮮王朝陶器であり、京都では数少ないものである。また、朝鮮半島への注文製作を物語る、数少ない出土資料である。史料からは、松屋久好の『茶会記』のなかに、慶長6(1601)年頃に注文茶碗を示すものとみられる記載がある^(注8)ということである。それがどのような種類のものであるかは不

明であるが、出土資料からみても、ほぼその頃には注文製作が行われていたことは推測される。ただ、注文製作については不明な部分が多く、今後の検討が必要である。現在伝世している茶器と出土遺物では、共通するものが少ないことも、今後の検討課題である。

この小文執筆にあたり、(財)京都市埋蔵文化財研究所堀内明博氏からは、多くの有益なご教示をいただいた。文末ではあるが、記して感謝いたします。

(ひきはら・しげはる＝当センター調査第2課調査第2係主任調査員)

注1 茶道資料館『遺跡出土の朝鮮王朝陶磁 一名碗と考古学』 1990

注2 田口昭二『美濃焼』 ニュー・サイエンス社 1983

注3 鄭良謨「李朝陶磁の編年」(『世界陶磁全集』19 李朝 小学館) 1980

注4 注1に同じ。

注5 大橋康二『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社 1989

注6 百瀬正恒「平安京とその周辺における遺跡出土高麗・李朝陶磁器について」(『貿易陶磁研究』第5号 日本貿易陶磁研究会) 1985

注7 18遺跡のうち、臨川寺から出土した象嵌青磁については、江戸時代後期の京焼による写しの可能性が指摘されている。また、左京三条三坊十一町押小路殿跡出土の碗は、萩焼ではないかとの指摘がある。この2遺跡をのぞけば、16遺跡となる。

注8 赤沼多佳「茶の湯の海外陶磁」(『江戸時代の茶陶 ー海外への注文ー』 茶道資料館) 1983

府下遺跡紹介

50. 平安京羅城門跡

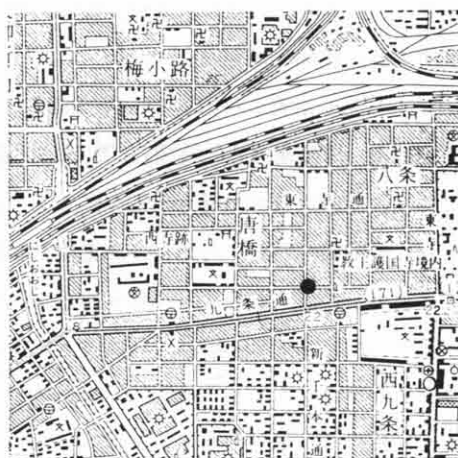
平安京羅城門跡は、京都市南区唐橋羅生門町にあって、平安京の南の入口とも言うべき門である。この羅城門は、『今昔物語』や『寛平御遺誠』にも登場している。それによれば、平安時代の羅城門には死体が放置してあったり、鬼が住むところとして描かれており、あまりよい場所というイメージは存在していないところでもある。

羅城門は、朱雀大路と九条大路が交差するところに設けられた門で、基本的には外国使節をはじめとする各使者などの出入りする門で、まさしく平安京の表玄関とも言うべきところに相当する。現在の羅城門跡と書かれた石碑は、九条通りよりもやや北へ入ったところにあるが、これは九条通りが平安京の九条大路よりも東寺のところあたりから西南西の方角へカーブしてきていることに起因する。

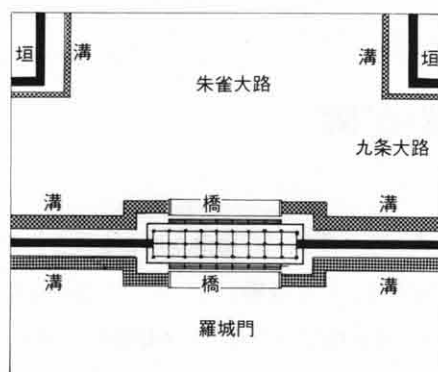
ところで、羅城門は、一般には羅生門とも書かれることがあるが、むしろこれは当て字である。平城京でも同様の例が認められるように、かつて羅城門の存在したところに「らしょう」とか「らいしょう」の名が地名として残存したため、このような表記がなされるようになったとみられる。

羅城門の規模や建築の形態などについては、史料が少ないため詳しいことはわかっていない。『拾介抄』宮城部には、「羅城門 二重閣七間」とあって、間口が7間で、二重とあるから、二階建ての楼状の構造をした門であることがわかる。裏松固禪は『大内裏図考証』のなかで、この記事を批判して、9間×2間に復原した。ただ、現時点では、他に史料がなく、詳しくはわからないが、固禪の復原には根拠がはっきりしていないことから、7間とする意見の方が有力である。

また、『延喜式』左京職京程条によれば、「南京極大路十二丈、羅城外二丈 垣基半三尺、犬行七尺、溝広一丈、路広十丈」とあって、羅城の記述がみえる。実際には京



第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 羅城門推定図

域全体を囲った羅城は築かれていないので、この羅城は、南京極大路南部分をさしているともみられる。したがって、羅城門を中心とした南の地域は、唐の都城をモデルにもっとも近い形態をめざしていたと言えるであろう。

ところで、黒川道祐の著した『雍州府志』には、東寺の塔頭観音堂にある八臂毘沙門天像はもと羅城門の本尊であって、昔は楼の上に安置されていたとする伝承を紹介し

ている。続けて、東寺僧の話によるとして、玄宗が西蕃に攻められたとき僧の不空に毘沙門天を念じさせたら、西蕃が敗走したので楼の上に毘沙門天像を安置するようになったという中国の故事を引き、これに基づいて羅城門上に安置されたが、羅城門の配絶後に東寺に移されたのではないかという。今、東寺にある兜跋毘沙門天像がこれにあたるのではないかとされているが、こちらの方は八臂毘沙門天像ではないので、必ずしもこの伝承が真実を伝えたものであるかどうかは疑わしい。

羅城門は、平安京遷都後、あまり時間が経たないうちに倒壊している。『日本紀略』弘仁7(816)年8月己酉条には、「夜大風、倒羅城門、京中諸国亦被害」とあり、遷都後わずか二十年あまりで倒壊している。ただ、この時はまもなく再建されたようで、『百鍊抄』天元3(980)7月9日条には、「大風暴雨、羅城門及諸門等顛倒」とあるから、約150年後に再び倒壊したことになる。この後は、藤原道長による再建の計画があるなど、何度か計画だけはなされているが、結局、種々の理由で羅城門の再建は行われなわれず、そのまま放置された状態であった。

『小右記』治安3(1023)年6月11日条には、「上達部及諸大夫令曳法成寺堂礎、或取宮中諸司石、神泉苑門并乾臨閣石、或取坊門羅城門左右京職寺々石云々、可嘆可悲、不足言」とあり、藤原道長が法成寺の堂を建てるときに、礎石として宮中諸司の石や神泉苑の門、それに乾臨閣の石といった宮中の建物の礎石だけでなく、坊門や羅城門などの石を取ったと述べている。このことからみると、11世紀には羅城門は、礎石だけが残るような状態になっていたようである。したがって、これまで言われているように、『今昔物語』巻二十九に収められている「羅城門上層に登りて死人を見し盗人の語」という物語は、天元3年の倒壊以前の姿を表現したものということになる。むろん、これはあくまでも伝承であって、話の内容自体は史実を伝えたものではない。

羅城門跡の発掘調査は、1961年、1977年と断続的に行われた。発掘調査では、後世の攪乱が多く、また、中世以降には墓地として利用された時期があったため、溝状の遺構が検出されたものの、はっきりと羅城門そのものに関係する遺構は検出されていない。遺物としては、緑釉陶器や瓦をはじめ、いくらか平安時代を中心とするものが出土している。今後の調査に期待される。

(土橋 誠)

〈参考文献〉

小酒井儀三「羅城門の址」『京都史蹟』1-2 1929

佐原・小倉「平安京羅城門址の発掘調査(1)(2)」『古代文化』7-3・4 (財)古代学協会 1961

滝川政次郎『京制並に都城制の研究』 角川書店 1967

『京都の歴史』第1巻

福山敏男・杉山信三・浪貝 毅「羅城門跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年報(1971)』 京都市文化観光局 1972

「平安京跡発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財研究所概要集(1978)』 1979

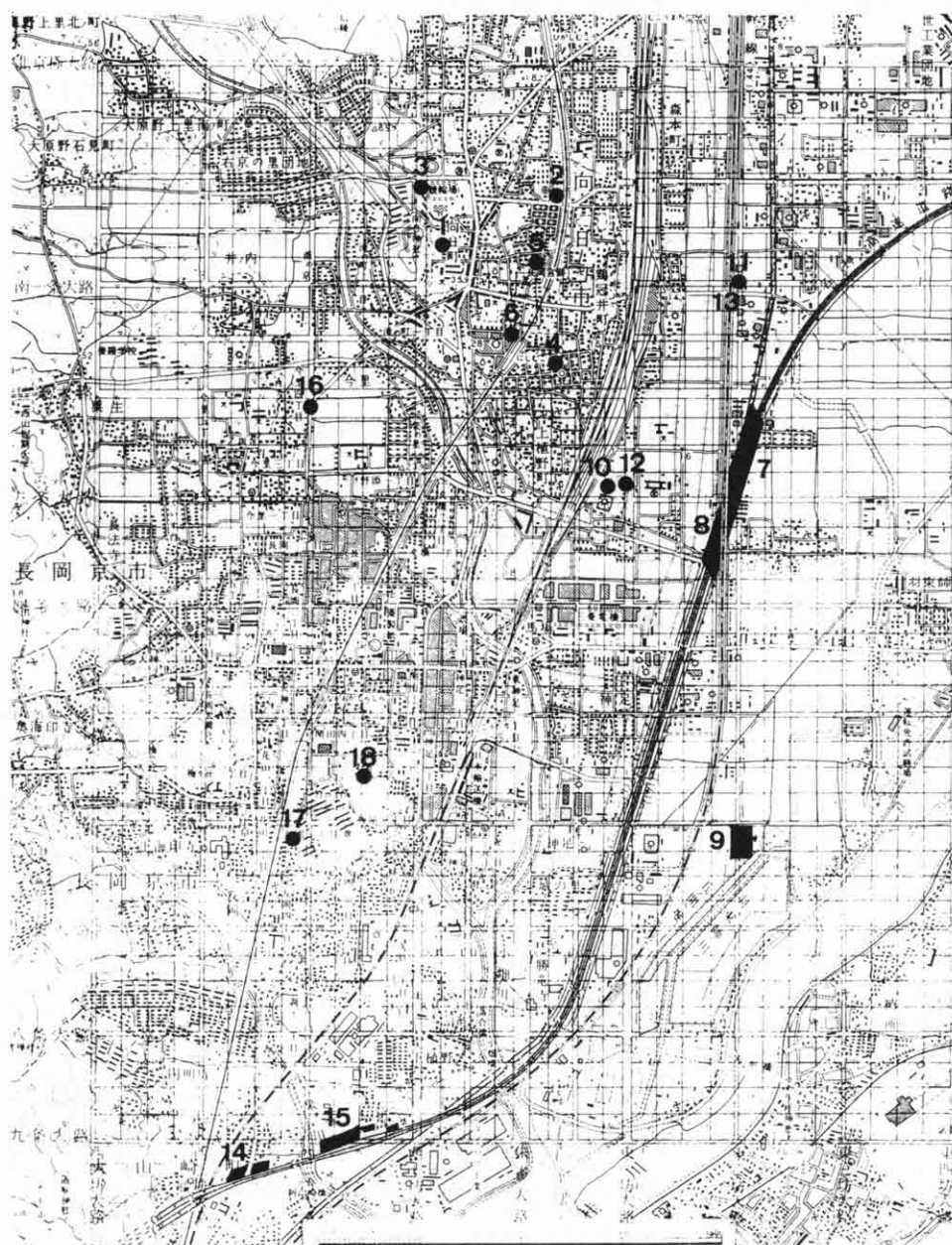
長岡京跡調査だより・36

平成2年11月28日・12月19日・同3年1月23日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮域6件、左京域7件、右京域5件の計18件であった。これら27件の調査地は、位置図・一覧表のとおりである。このうち、主なもののいくつかについて、調査成果を簡単に紹介する。

調 査 地 一 覧 表

(1991年1月末現在)

番号	次 数	地 区	調 査 地	調 査 機 関	調 査 期 間
1	宮内248次	7AN18E	向日市向日町北山18-5	(財)向日市埋文	10/1～12/28
2	宮内249次	7AN8F	向日市寺戸町東野辺39	(財)向日市埋文	11/1～11/30
3	宮内250次	7AN18F	向日市寺戸町天狗塚	(財)京都府埋文	11/8～
4	宮内251次	7AN10O	向日市上植野町南開34-11	(財)向日市埋文	12/1～1/9
5	宮内252次	7AN9X	向日市鶏冠井町大極殿26-16	(財)向日市埋文	12/3～12/14
6	宮内253次	7AN15T	向日市上植野町南開60-1 他	(財)向日市埋文	1/7～1/21
7	左京241次	7ANXKT 7ANXKM	京都市伏見区羽束師菱川町山駈手・小角	(財)京都府埋文	4/9～
8	左京242次	7ANFSK-3 他	向日市上植野町尻引南淀井・桑原	(財)京都府埋文	4/9～
9	左京251次	7ANYTH-1	京都市伏見区淀水垂町	(財)京都市埋文	7/9～
10	左京252次	7ANFKE-2 7ANFIR	向日市上植野町車返し・池尻	(財)京都府埋文	8/6～
11	左京254次	7ANEHD-3	向日市鶏冠井町七反田14-1	(財)向日市埋文	10/11～1/25
12	左京257次	7ANFKE-3	向日市上植野町車返し 8	(財)向日市埋文	10/1～3/31
13	左京259次	7ANEHD-4	向日市鶏冠井町七反田14-1	(財)向日市埋文	1/7～
14	右京349次	7ANSIR 他	大山崎町円明寺井尻他	(財)京都府埋文	4/9～3/31
15	右京357次	7ANSID-2	大山崎町円明寺壺町田他	(財)京都府埋文	4/9～3/31
16	右京362次	7ANITT-14	長岡京市今里四丁目17-1	(財)長岡京市埋文	9/12～11/19
17	右京363次	7ANNKN-5	長岡京市友岡一丁目	(財)京都府埋文	10/22～
18	右京364次	7ANMSI-10	長岡京市開田四丁目	(財)長岡京市埋文	11/8～12/15



▽番号は一覧表・本文()内と対応

調査地位置図

宮内第248次(1)

(財)向日市埋蔵文化財センター

朝堂院北西官衙の調査である。築地・掘立柱建物・井戸・土坑などを検出した。築地は南北方向で、柱間7尺、バラスの上に版築する。築地の東側の建物は2面廂付きの大型の南北棟建物である。築地の西側には、二重の掘立柱の塀があり、その西側に井戸と小形の南北棟建物が伴う。緑釉の高杯や土錘をはじめ長岡京期の遺物が豊富に出土した。

左京第251次(9)

(財)京都市埋蔵文化財研究所

左京七条三坊一・二町、東二坊大路の調査である。古墳時代の水田・川や長岡京期の川、平安時代の塚・水田などを検出。水田は地形に沿って造成された小区画水田である。東二坊大路から東では六条大路は検出できず、また一町の宅地でも建物遺構などはみつかっていない。長岡京の完成の度合を考える上で重要である。

左京第254次(11)

(財)向日市埋蔵文化財センター

東二坊大路・南一条大路交差点及び鶏冠井遺跡の調査である。縄文～江戸時代までの多量の遺構・遺物を検出した。長岡京関係では、南一条大路の路面中央で東二坊大路の両側溝を確認し、ここでも南北道路の側溝を優先して通していることが判明した。側溝からは、土馬・墨書人面土器・斎串・獣骨などの祭祀遺物が出土した。この他、縄文土器や弥生時代前期末～中期前葉の堅穴住居・土器棺墓・土坑・河川、中近世の水田などを検出した。

左京第257次(12)

(財)向日市埋蔵文化財センター

左京三条一坊十三町・三条二坊四町、東一坊大路及び中福知遺跡の調査である。前回紹介した左京第252次調査地の西側にあたり、東一坊大路の両側溝及び四町の宅地で掘立柱建物4棟・目隠し塀・宅地西限塀などを検出した。土坑からは緑釉土器・瓦・石帯・墨書土器・土馬・ミニチュア竈などが出土した。下層からは、古墳時代の河川・しがらみを検出、さらに下層で弥生時代の水田を部分的に確認した。

(平良 泰久)

センターの動向 (2. 11～3. 1)

1. できごと

11. 3 京都府埋蔵文化財調査研究センター10周年記念特別講演会(別掲)

5 蔵ヶ崎遺跡(加悦町)発掘調査開始

6 燈籠寺遺跡(木津町)発掘調査開始

7 伏見城跡(京都市)発掘調査開始

長岡宮大極殿祭出席(松阪局長・中谷次長)

8 蒲生遺跡(丹波町)発掘調査終了

8～9 全国埋蔵文化財法人連絡協議会コンピュータ等導入研究委員会(於：大阪市)出席(安田総務係長・土橋調査員)

10～11 日本考古学協会総会(於：熊本県熊本市)出席(小池・森・石崎調査員)

13 長岡宮跡第250次(向日市)発掘調査開始

15 全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於：東京都)出席(松阪局長・小林次長)

両丹文化財保護連絡協議会(於：綾部市)出席(安藤調査第2課長)

20 10周年記念特別展覧会企画委員会

21～23 作業主任者技能講習会「土止め地山掘削等」(於：京都市)出席(石崎・岸岡調査員)

22 長岡京左京第252次(向日市)発掘調査現地説明会

26 荒堀遺跡(夜久野町)発掘調査開始

28 長岡京連絡協議会

平安京跡左京(京都市)現地説明会

29 こくばら野遺跡(久美浜町)現地説明会

八後遺跡(木津町)発掘調査開始

12. 1 第59回研修会(別掲)

12. 7 第29回役員会・理事会(於：京都堀川会館)出席(福山敏男理事長，樋口隆康副理事長，松阪寛支常務理事，中沢圭二，川上 貢，上田正昭，藤井学，足利健亮，都出比呂志，藤田价浩，木村英男，堤圭三郎の各理事，岸 義次監事)

こくばら野遺跡(久美浜町)発掘調査終了

11～12 宮津高校社会人講師派遣(森・森島調査員)

12 樋口隆康副理事長，内里八丁遺跡現地視察

柳瀬昭彦岡山県古代吉備文化財センター課長補佐，内里八丁遺跡現地指導

17 佐原 眞理事，内里八丁遺跡現地視察

宮津城跡(宮津市)発掘調査開始

18 天若遺跡(日吉町)現地説明会

19 工楽善通奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室長，内里八丁遺跡現地指導

長岡京連絡協議会

- 20 遠所遺跡(弥栄町)現地説明会
興戸遺跡(田辺町)現地説明会
- 12.20 瓦谷遺跡(木津町)発掘調査終了
- 21 長岡京左京第252次発掘調査終了
1. 9 都出比呂志理事, 内里八丁遺跡現地視察
- 10 樋口隆康副理事長, 瓦谷遺跡(木津町)現地視察
- 14 服部共生京都府立大学名誉教授, 高谷好一京都大学東南アジア研究センター教授, 古川久雄同センター助教授, 内里八丁遺跡現地指導
- 17 南 博史京都府京都文化博物館学芸員, 内里八丁遺跡コンピュータ測量現地指導
- 18 平安京跡発掘調査終了
- 19 桑飼上遺跡(舞鶴市)現地説明会
- 1.19 内里八丁遺跡現地説明会
- 21~22 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於:滋賀県伊香郡西浅井町)出席(松阪局長, 中谷次長, 安田総務係長)
- 22 燈籠寺遺跡関係者説明会, 発掘調査終了
- 22~25 奈良国立文化財研究所研修(写

真測量外注管理課程)水谷係長出席

- 23 長岡京連絡協議会
- 24 長岡京跡右京第363次(長岡京市)発掘調査関係者説明会
- 25 足利健亮理事, 天若遺跡現地視察
飯村 均, 佐久間一正福島県文化センター調査員, 遠所遺跡見学
長岡京跡右京第363次発掘調査終了
- 30 荒堀遺跡関係者説明会
- 1.30 天若遺跡発掘調査終了

2. 普及啓発事業

11. 3 京都府埋蔵文化財調査研究センター10周年記念特別講演会「埋蔵文化財この10年」(於:京都市社会教育総合センター)—講演:和田 萃「近年の重要遺跡・遺物の発見と古代史研究」, 都出比呂志「日本の考古学この十年」
12. 1 第59回研修会(於:八木町中央公民館)—丹波地方の最新の発掘成果から—三好博喜「天若遺跡の発掘調査について」, 樋口隆久「亀岡市篠遺跡の調査について」, 森下 衛「丹波の古墳時代」

受贈図書一覧(2.11～3.1)

苦小牧市埋蔵文化財センター	苦小牧市静川37遺跡発掘調査(第2次)概要報告書, とまこまい埋文だより No. 21
岩手県立埋蔵文化財センター (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	わらびて No. 50 上越新幹線関係埋蔵文化財調査終了記念図録 躍動する地域社会—人との交流から見た地域史の解明—, (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第85・108・111～112集, 埋文群馬 No. 9～10
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	若宮遺跡, 芳賀北曲輪遺跡, 元総社明神遺跡 VII 研究紀要 第7号, 埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報 10, 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第84～89・91～94集
東京都埋蔵文化財センター	資料目録 4, 東京都埋蔵文化財センター研究論集 VIII, 東京都埋蔵文化財センター年報 10, 東京都埋蔵文化財センター調査報告第11集
神奈川県立埋蔵文化財センター 富山県埋蔵文化財センター	かながわの考古学 第1集 平成2年度特別企画展図録 祈りの世界—埋葬遺構にみる人々の想い—, 埋文とやま 第32号
(財)浜松市文化協会	松東遺跡発掘調査報告書, 浜松市松東遺跡発掘調査報告書 II, 有玉西土地区画整理事業に伴う文化財調査概要
(財)愛知県埋蔵文化財センター 滋賀県埋蔵文化財センター	埋蔵文化財愛知 No. 23 滋賀埋文ニュース 第128～129号
(財)大阪市文化財協会	大阪市中央体育館地域における難波宮跡・大坂城跡発掘調査中間報告 II, 葦火 29号
(財)東大阪市文化財協会	東大阪市文化財協会ニュース Vol. 5 No. 1
(財)八尾市文化財調査研究会 兵庫県埋蔵文化財調査事務所 奈良国立文化財研究所	(財)八尾市文化財調査研究会報告 27 兵庫県文化財調査報告書 第35～36・51～64・66～68冊 奈良国立文化財研究所年報 1989, 平城宮発掘調査出土土簡概報 22～23, 奈良国立文化財研究所学報 第48冊
奈良県立橿原考古学研究所	橿原考古学研究所紀要 考古學論攷第14冊, 橿原考古学研究所年報15 昭和63年度
(財)元興寺文化財研究所 岡山県古代吉備文化財センター 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	(財)元興寺文化財研究所通信 No. 36 所報吉備 第9号 草戸千軒 No. 208～211
(財)徳島県埋蔵文化財センター	徳島県埋蔵文化財センター年報 平成元年(1989)年度
訓子府町教育委員会 岩手県教育委員会 栃木県教育委員会	北栄40遺跡 岩手県文化財調査報告 第86集 栃木県文化振興事業団年報 平成元年度, 栃木県埋蔵文化財調査報告 第89～90・93～94・98～101・106～107・110集
前橋市教育委員会	昭和63年度文化財調査報告書 第19集, 平成元年度文化財調査報告書 第20集, 天神II遺跡, 内堀遺跡群 III, 柳久保遺跡群 VII,

袖ヶ浦町教育委員会
東京都北区教育委員会
大山町教育委員会
大津市教育委員会
信楽町教育委員会
野洲町教育委員会

豊中市教育委員会
藤井寺市教育委員会
神戸市教育委員会

加東郡教育委員会
大和郡山市教育委員会
高取町教育委員会
山口市教育委員会
徳島市教育委員会
高松市教育委員会

宗像市教育委員会
佐賀市教育委員会
鎮西町教育委員会
大分県教育委員会

鹿児島県教育委員会
指宿市教育委員会

(社)日本金属学会附属金属博物館
土浦市立博物館
栃木県立博物館
埼玉県立さきたま資料館
国立歴史民俗博物館
芝山町立芝山古墳・はにわ博物館
調布市郷土博物館
東京都目黒区守屋教育会館郷土資料室
世田谷区立郷土資料館
出光美術館

元総社明神遺跡Ⅵ, 群馬県前橋市弥勒遺跡
袖ヶ浦町史 通史編(下巻)
北区埋蔵文化財調査報告 第7集
富山県大山町中世城館調査報告書
大津市埋蔵文化財調査報告書 16
信楽町文化財報告書 第4集
昭和54年度 野洲・祇王地区遺跡発掘調査概要報告書, 平成元年度 野洲町内遺跡発掘調査概要
御獅子塚古墳, 文化財ニュース 豊中 No.13~14
藤井寺市文化財報告 第6集
狩口台遺跡発掘調査報告書, 住吉宮町遺跡—第11次調査—, 舞子東石ヶ谷遺跡Ⅱ, 楠・荒田町遺跡Ⅲ, 長田神社境内遺跡発掘調査概報, 楠・荒田町遺跡発掘調査概報—第5次—, 郡家遺跡
加東郡埋蔵文化財報告 10~11
大和郡山市文化財調査概要 15~18
高取町文化財調査報告 第7・10冊
山口市埋蔵文化財調査報告 第31~34集
名東遺跡発掘調査概要
久米池南遺跡発掘調査報告書, 平木1号墳試掘調査報告書, 弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報Ⅱ~Ⅲ
宗像市文化財調査報告書 第22・24・27~28集
佐賀市文化財調査報告書 第27~33集
鎮西町文化財調査報告書 第5~9集
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 2, 植田市遺跡Ⅲ, 一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報, 一般国道10号宇佐別府道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ, 一般国道10号宇佐バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ
鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 52~54
指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
金属博物館紀要 第15号
土浦市立博物館紀要 第2号
栃木県立博物館人文収蔵資料目録 第3集
さきたま風土記の丘企画展 古墳の年代をはかる展示解説書
歴博 第44号
かんぼう武射 No.2
日本の郷土玩具~加藤文成氏寄贈コレクション~
目黒区所蔵 高句麗広開土王碑拓本写真集
特別展 喜多見氏と喜多見流茶道, 資料館だより No.13
出光美術館館報 第72~73号

長岡市立科学博物館
山梨県立考古博物館
浜松市博物館
沼津市歴史民俗資料館
愛知県陶磁資料館
大津市歴史博物館
高島町歴史民俗資料館
彦根城博物館
兵庫県立歴史博物館
神戸市立博物館
尼崎市立田能資料館
島根県立八雲立つ風土記の丘
福岡市博物館
北九州市立考古博物館
佐賀県立博物館・美術館
佐賀県立九州陶磁文化館
長崎県立美術博物館
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
沖縄県立博物館

東北大学埋蔵文化財調査室
早稲田大学校地埋蔵文化財調査室
早稲田大学考古学会
東海大学校地内遺跡調査団
金沢大学文学部考古学研究室
名古屋大学文学部考古学研究室
近畿大学

天理大学附属天理参考館
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
山口大学埋蔵文化財資料館

日本窯業史研究所
東北新幹線赤羽地区遺跡調査会
板橋区大門遺跡調査会
落越遺跡調査団
鶴川第二地区遺跡調査会
国立国会図書館
(株)朝日新聞社
雄山閣出版株式会社

長岡市立科学博物館研究報告 第25号
第8回特別展 古墳時代が聞こえる
浜松市博物館だより No.32
資料館だより 95
愛知県陶磁資料館研究紀要 8
博物館だより 第4号
高島の民俗 第72号
彦根城博物館だより 11
わたりやぐら 第18号, 歴博ニュース No.33
博物館だより No.33
田能資料館図録
八雲立つ風土記の丘 No.104
福岡市博物館だより No.1
紫川一弥生・古墳時代の風景—
佐賀県立博物館・美術館調査研究書 第14~15集
九州陶磁文化館年報 平成元年度 (No.9)
長崎県立美術博物館だより No.110
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース No.24

県立博物館総合調査報告書 VII, 沖縄県立博物館紀要 第16号, 沖縄県立博物館年報 No.23, 沖縄県立博物館だより No.30

東北大学埋蔵文化財調査年報 3
早大埋蔵文化財調査室月報 No.67~69
古代 第90号
東海大学校地内遺跡調査団報告 1
金大考古 第18号
名古屋大学考古学陳列室だより 第2号
近大山賀遺跡 II, 小若江遺跡第5次調査・山賀遺跡第4次調査報告書

天理参考館報 第3号
岡山大学構内遺跡調査研究年報 7

山口大学構内遺跡調査研究年報 VIII

日本窯業史研究所報告 第24~37冊
袋低地遺跡—自然科学編 1—, 同 2
大門遺跡発掘調査報告
東京都八王子市中郷遺跡
真光寺・広袴遺跡群 VI
日本全国書誌 No.1781
アサヒグラフ 3577号
古墳時代の研究 第10巻

(株)名著出版	歴史手帖 第205～207号
鎌倉考古学研究所	円覚寺統燈庵埋蔵文化財発掘調査報告書, 朝比奈砦遺跡発掘調査報告書, 由比ヶ浜三丁目199番1地点遺跡調査報告, 史跡若宮大路遺跡発掘調査報告書Ⅳ, 浄明寺田楽辻子遺跡, 大倉幕府周辺遺跡群
本郷遺跡調査団	海老名本郷Ⅵ
(財)山梨文化財研究所	帝京大学山梨文化財研究所報 第11号
(財)古代学協会	土車 第56号
(財)冷泉家時雨亭文庫	志くれてい 第34・35号
古代を考える会	古代を考える 51・52
吉馬古窯跡群埋蔵文化財調査会	社・吉馬—古窯跡群等の発掘調査報告書—
下田遺跡調査団	下田遺跡発掘調査概要 しもだ
(財)黒川古文化研究所	黒川古文化研究所名品選
木簡学会	木簡研究 第12号
朝鮮学会	朝鮮学報 第136輯
西大寺	西大寺防災施設工事発掘調査報告書
(財)向日市埋蔵文化財センター	平成元年度 財団法人向日市埋蔵文化財センター年報 都城2, 向日市埋蔵文化財調査報告書 第29・30集
宮津市教育委員会	みやづの昔話—北部編—
福知山市	福知山市史史料編 三
京都府立総合資料館	総合資料館だより No. 86
(財)京都府文化財保護基金	京都の文化財—その歴史と保存—, 文化財報 No. 71
福知山市郷土資料館	福知山城の石垣
亀岡市文化資料館	開館5周年記念特別展 明智光秀と丹波・亀岡
京都市歴史資料館	京都市歴史資料館紀要 第7号, 平成元年度 京都市歴史資料館年報 No. 8, 特別展図録 平安京以前の京都
京都大学考古学研究会	第42トレンチ
京都橘女子大学	京都橘女子大学研究紀要 第17号
口丹波史談会	口丹波史料 8
(株)京都新聞社	京都滋賀古代地名を歩くⅡ
伊野近富	中世土器研究 合冊(51～60号)
松井忠春	季刊考古学 第33号
森島康雄	中世土器研究 合冊(51～60号), 中近世土器の基礎研究Ⅵ
守屋雅史	金龍・金馬と動物国宝展—陝西省出土文物—

—編集後記—

年度末になり、ようやくあたたかくなりましたが、情報39号が完成しましたのでお届けします。

本号では、当センターが調査を実施した遠所遺跡群・長岡京跡左京第252次について掲載しました。特に、遠所遺跡群は、丹後半島でみつかった大規模な製鉄遺跡として、近年注目を集めています。また、長岡京跡左京第252次調査では、平安京へ遷都した後にも比較的大規模な建物の存在したことがわかりました。よろしく御味読下さい。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第39号

平成3年3月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)